



米原小学校長室にある渡邊楠亭先生の肖像画

平成二十六年復刻版

# 楠亭詩集とその背景

— 湖東の聖人「渡邊楠亭」の漢詩を読み解く —

田中弥一郎



筑摩から東に伊吹の秀峰をのぞむ。「一窓湖に臨み  
一窓山に面す」と詩にもうたわれている。



現在も居間に先生の書「泰不驕」の詩が飾られている。



楠亭詩集の舞台となった筑摩から見た湖岸の風景  
(向かって右端に渡邊家の住居がある。)



「竹園師湖中を帰るを送る」の詩にも出ている  
朝妻湊の址。

「墓碑高きを要せんや、老楠、藤藤を継ぎて千載に朽ちざるなり」と、小野湖山の追悼詩にうたわれている楠亭先生の墓。



現在の渡邊家の屋敷内に遺る楠亭先生の祠。中に、かつての楠で造られた楠亭像が安置されている。

目次

序文	9
一、楠亭先生との出会い	16
二、楠亭先生の考え方と現代性	19
三、楠亭先生を生んだ風土と時代相	23
四、漢詩の考察	23
新春を寿ぐ	23
其一	23
其二	24
其三	26
其四	27
其五	29
其六	31
其一	32
元日	35
春草	35

示友生	61
夏至作	63
偶作	64
商鞅	66
竹亭觀螢	69
勞事	70
訪月沢上人客舍	72
自述	74
寄楓園竜丘二尊者	75
呈同學諸君	77
夏日野村君來遊喜賦	79
偶作	81
寄竹子鳳老翁	82
夏夜即時	84

春草	37
無題	40
春草	41
其四	43
大洞春景	45
放吟	46
墨梅	48
賞梅	50
無題	51
偶作	53
賞梅	55
泰不驕	57
無題	58
無題	60
其二	61
其一	62
其二	63
其三	64
其四	65

贈杏村山人	85
寄南谷盟兄需村山人之画	87
仲秋作	88
岡広松三太夫見枉駕	90
客中奉寄青山尊者	92
客中秋	94
送竹園師帰湖中	96
即時	98
寄懷細香女史	99
即時	102
無題四首	103
山中四時小景	108
殘菊	109
読南宮詩抄	111

無題	112
樂在植物	114
冬夜雜詠	115
〃	116
〃	117
〃	117
五、楠亭先生の死と追悼詩	119
1 中川漁村の「楠亭記」	121
2 中川漁村の「楠亭記釈」	121
3 追悼楠亭渡邊翁（小野湖山）	124
4 小野湖山	127
5 小野湖山追悼詩釈	127

六、まとめと今後の問題	131
〈参考資料〉楠亭記（長野義言）	131
〈参考文献〉	131
〈著者の略歴〉	131
「復刻版にあたって」	131

「楠亭詩集とその背景」の発刊にあたって

現在の混とんたる世相の中で、基礎学力と非行の増大という教育界の直面する現実  
は誠に厳しく難しい多くの問題をかかえております。

こうした教育の危機を乗り切るためには、先ず教師の姿勢が問題となって参ります。

昔から「温故知新」という言葉にありますように、古い事を研究して、そこから新  
しい知識や道理を見出して、更に進んだものを創造していくことは、洋の東西を問わ  
ず、人類文化の進展における不変の鉄則であります。

幸いに当米原町は、渡辺楠亭先生を始め、幾多の偉大な先人が輩出しておられます  
ことは皆様方の悉知のことでもあります。

新しい教育課程の改訂の基本方針として、「豊かな人間づくり」が大きく打ち出され、  
「ゆとりと充実」が、学校独自の立場から見直され、考え直さなければならない時期  
に到っております。

過去の教育のあとをふりかえってみますと、とかく表面的なものに押し流されて、  
内容的なもの深まりのないままに、次の新しいものを追うといった傾向が全くなし

としない現状でありました。こうした砂上の楼閣のようなものであつては、如何程立  
派な教育課程が改訂され、豊かな人間性が強く叫ばれても、教育自体は少しもよくな  
っていかないのであります。

「豊かな人間性とは何か」「ゆとりと充実」を学校の現場で、どう受け止めて、日々  
の実践に、どのように反映していくかを、充分時間をかけて討議し、研究し、内面的  
な積み上げを行っていくことが、先ず大切ではないかと思ひます。

「鹿を追う猟師 山を見ず」という諺がありますが、我々教育界に身をおくものは、  
どうかすると、身近な、目先のものに心を奪われ勝ちですが、「教育は百年の大計であ  
る」といわれている以上、常に教育の全体像に目を注ぐことを忘れず、広い視野と展  
望の上に立った教育の実践が大切ではないかと考えます。

幸いに本町の先生方は、日頃からこうした点にご留意いただきまして、数々の立派  
な成果を上げていただいておりますことは、米原町の教育行政をお預かりいたしてお  
ります私共の深く感謝致しておるところでございます。

こうした中で、醒井小学校の教頭であります、田中弥一郎先生が「楠亭詩集とその  
背景」と題する冊子を発刊されることになりました。入江小学校の教頭として赴任以  
来、楠亭先生の業績や学徳に強く心をひかれ、自然の美しさを愛し、「ゆとりと充実し

た一生」を送り、多くの人におしまれてこの世を去っていかれた楠亭先生の豊かな人間性を折にふれてよまれた漢詩から、探っていきこうとされたものであります。

漢詩については門外漢でありますので、私には充分解らないのであります。現在楠亭先生に関する資料が極めて乏しい中で、遺された漢詩を新しい感覚で解釈し、そこから楠亭先生の人間像をとらえていこうとする試みは、確かに新しい研究であり田中先生の五年間に及ぶ、長い努力に敬意を表するものであります。

これを契機として、楠亭先生に対する一般の方々の関心が深まり、それぞれの郷土の先覚者を見直し、教育の現場に少しでも寄与するところがあれば、米原町の教育については県全体の教育にも、誠によるこばしい次第と存じます。

願わくば、この研究を更に一歩進めて、児童・生徒にも理解できる課外の読みものとして編集されるならば、道徳の資料としても活用され、楠亭先生が、より多くの児童・生徒に、心のともしびとして灯されていくことを、切に祈念して止まないものです。

昭和五十四年十一月吉日

坂田郡米原町教育委員会教育長 福田 定 観

まえがき

現代人の生活の中から、徐々に遠ざかりつつある漢詩というタイムトンネルを通過して、遠い過去の世界とのつながりを見つけ、今まで見ることのできなかつた新しい世界を見つけていくことは、苦勞の多い仕事であると同時に、大きな楽しみでもある。

不思議な宿縁というべき出会いから、湖東の聖人と仰がれている渡邊楠亭先生の詩集を手にし、それを読み進めていくうちに、今まで明らかにされていなかった楠亭先生の具体的な人間像が、まるでタイムトンネルを通過してきたかのように、次々と浮かび上がってくるのに驚かされた。

春を待つ早春の湖岸の大自然をうたった詩、遠来の客を迎えて湖上に遊んだ詩、一日の激しい労働を終えて濁酒に疲れをいやし、勤勞の喜びを素直にうたったものなど、心に残る印象深い詩が多く見られた。

そこには、筑摩の自然を深く愛し、土官、栄達の道も固辞して、自己の信念に、つつましく生きぬいてこられた楠亭先生の姿を、血の通った具体的なものとしてとらえることができる。

身分、貧富差別の厳しかった当時としては、めずらしく交友の幅も広く、学徳の高い僧

や藩の儒管等、トップクラスの知識人と親しく交わっていたかと思うと、一方では、齒の抜け落ちた醜い顔で、人からも相手にされない一徹者の老いた漁師を、魚のにおいのしみついたそのあばら屋に訪ね、とつとつとして語るその言葉に、謙虚に耳を傾けている。そこには、総ての虚飾をぬぎ去った後の、はだかの人間同士の温かい心と心のつながりが見られる。

また、天保十四年の老中水野忠邦の厳しい改革を暗に批判した「商鞅（シヨウオウ）」の詩も、豊富な漢学の素養を縦横に駆使してつくられているだけに、短絡的に幕政の批判はされていないが、鋭い政治感覚が、その奥にひらめいていることがうかがえる。

「賞梅」「墨梅」「大洞春景」等の詩を読むと、「自然と共に豊かに生きる人生」とはどんなものか、楠亭先生の折にふれてよまれた詩の中から、具体的につかむことができる。

楠亭先生の生きてこられた時代は、今から百二十年余り前の時代で、現代にそっくりそのままあてはめることはできないが、然し楠亭先生の五十四年の生涯は真に「ゆとりと充実した人生」であったことが、いくつかの実例を通して、それを見ることでできる。

当時は、物質的な面では現代と比較にならない貧しいものではあったが、精神的な面では遠く及ばない、すばらしいものがあつたことがうなずける。

今日の我々の生活は文化の発達と共に、豊かで恵まれたものになってきているが、然し精神的な面から眺めるならば、人間にとって、かけがえのない貴重なものが、文化の進展と共に、どんどん失われていることも事実である。

日頃我々の接している子どもたちの生活の中にも、こうした例が顕著に現れてきている。インベーダーゲームが有害であるとして禁止されると、またこれにかわる「ガチャンコ」といったものが姿を変えて店頭に現れ、まるで、もぐらもちのように、こつちをたたくとあちらに顔を出し、あちらをたたけば、こちらに顔を出すといった際限のないいたちこつこが繰り返されていって、しかも悪くなってきているのが現状である。今や局所的な場当たりでの対処の仕方では、どうにもならないものになってきている。

人間生活の原点ともいえる生命尊重の精神すら薄れ、まるで虫けらを殺すほどの関心をも示さないままに、他人の生命をうばって平然としている子どももいる。そして、それらは特殊な場合であるといつてすまずことのできないところに、現代社会の持つ病巣があり、常日頃我々が身近に接している子どもの生活の中にも、そうした因子がないとは断言できない。そして、何らかの刺激なり、環境の変化によって、その因子がいつ何時、爆発しないとも限らないところに、今日、我々の抱える問題点がある。

こうした現状の分析の上に立って、今日我々教師のやらなければならぬ事は一体何だろうかと自問して見る必要があるのではないだろうか。



やはり現在の教育に、先ず求められるものは、何といっても人間性の回復であり、それには過去に生きた人々のすぐれた生き方を謙虚に学び、それらを自分の能力に合わせて消化吸収し、更に自分の中に新しいものを創り出していく努力が大切である。

敗戦を境として、先人が長い間努力を重ねて築き上げてきた日本の良き伝統も、無難作に捨て去ってしまったことにも、その原因がある。

新教育課程の中でも、知、徳、体の調和のとれた人格の完成をめざし、「ゆとりと充実した学校生活」を送らせるよう学校の全体的な教育計画の中で特に配慮するよう、強調されている。新教育課程の主旨を現場に生かすために、我々は日夜努力を続けているが、まだ模索の段階で確たる路線を作るまでには至ってはず、修正に修正を重ねているのが現状である。

こうした中であって、身近な郷土の先人として、自ら実践することによって子弟を教育し、郷土の気風を一新させた渡邊楠亭先生の生き方は、多くの問題点を抱えて日夜悩み続けている我々教師に「今の教育に欠けているものは何か」また「今、我々教師は何をしななければならぬか」を語りかけてくれているようである。

私が楠亭先生の人徳にひかれ、浅学の身をかえりみず、自費出版を思い立ったのもこうした願いによるものである。

この研究を進めるに当たって、二回にわたって、県教育委員会の研究奨励金や県教育会の研究奨励金を受けたことは、大きな励みとなり勇気づけられた。未熟非才のために充分なる期待にそえなかった点、申し訳ない次第である。今回は、主に楠亭先生の詩集を中心にその背景となるものを比較検討をすることによって、今まで知ることのできなかつた新しい楠亭像を浮かび上がらせたいと思ったからである。何れ近いうちに「渡邊楠亭先生」の伝記も出版したい考えである。総て手作りであるために不備で読み難い点もあるが、諸賢の厳しいご叱正とご指導をお願いして擲筆する。

昭和五十四年 莊秋

田中 弥一郎

## 一、楠亭先生との出会い

昭和四十九年四月、湖岸の桜のつぼみがようやく咲き始めようとするころ、米原町入江小学校の新任教頭として赴任し、校長室に入った時、まず目についたのは、渡辺楠亭先生の大きな肖像画であった。先生が亡くなられた直後、弟子たちの手で作られたものらしく渡邊家に伝わっていたのを、学校へ寄贈されたということである。

人間、四十才からの顔は自分に責任があるといわれているが、晩年の楠亭先生の顔は温容の中にも引き締まった口元と広い額に、並々ならぬ意志の強さと気迫がみなぎって、やはり湖東の聖人とよばれていただけに、常人とは違ったものがあると心を打たれたものである。

それが縁となって楠亭先生に關した何か書物がないかと、教具室の古い本棚の中をあれこれ探しているうちに、「湖東の聖人渡辺楠亭」の文章があり、それを読んでいるうちに、楠亭先生の偉大な人間像の一端にふれて感動したのであるが、その中に引用されている先生の漢詩で、どうしても納得のいかないものがあり、疑問を感じた。

西風十里稻梁肥 昨夜山中霜如飛

正是家々農事閑 載星争出戴星歸

「秋風があたり一面に吹き始めると、稲穂が実りはじめ、抜けるような青い空の色に冷気が一段と加わってくると、農家は秋の穫り入れて忙しく活気を帯びてくる」という秋の農家のようすをうたった詩であるが、朝、星を戴いて野に出て働き、夕方を仰ぎながら帰路につかれる楠亭先生自身の姿が目には浮かんでくるようである。

知行合一の精神から、先生もみの、笠をつけ、泥にまみれて百姓仕事に精を出し、そのかたわら、子弟の教育を行い、道を講じておられたのである。

然し、ここで問題になるのは「正是家々農事閑」であるのに、どうして「載星争出戴星歸」というような激しい労働を必要とするのであろうか、という疑問である。

その疑問が解けないまま、校務が忙しく、そのままになっていたが、後日、楠亭先生の家を継いでおられる渡辺文雄氏、現在八十三才になられる方にお願ひして、「楠亭記」「楠亭詩集」を貸して頂き、それを全部コピーして検討してみると、「農事閑」はやはり間違いで、「農事閑」が正しいことが解った。たった一字の間違いであるが、閑と開ではまるで正反対であり、「開」(ダウ、ネウ)はさかんな有様で、この漢字なら正にこの詩にぴったりである。

おそらく印刷のミスであるが、それにしても、一字の漢字の違いで、正反対の意味になってしまうので、漢詩の持つ壁の厚さに今更ながら驚かされた。またそれと同時に、子ど

もにとって貴重な教材となるものでも、漢字という厄介な障害のために充分活用されないままに埋もれ、やがて風化し、消滅してしまうのではないか、という心配であった。

渡辺家からお借りした「楠亭記」「楠亭詩集」は、全部毛筆で書かれ、その上、くずし字で書かれているため、その解読は容易ではなく、よほどの物好きな人でない限り、利用ができない状態であった。

何か、学校で研究を始めようとする、「本を買ってもらわないとできない」という声を聞く。果たして新刊の高価な本でないと研究はできないものであろうか。ほこりをかむつて廃棄処分を持っているみすぼらしい本の中にも、子どもたちの魂の糧としてすばらしい価値のあるものが眠っているかもしれない。

身近に郷土の先覚者があり、児童の人間性を啓発するために、大いに役立つと思われるものがあっても、それが学校経営のなかで充分生かされていない場合が多く見受けられる。

道徳の授業を見せてもらっても、資料はほとんど外国のものばかりであるのはさびしい限りである。もつと我々の祖先が、血と汗で、この風土の中で営々と長年培ってきたものがあるはずで、それを与えなくては、学校の本当の意味の使命が果たせないのではないだろうか、ということを痛切に感じた。

こうした観点から、郷土の生んだ大人物である楠亭先生を正しく見直し、子どもたちの

感動を呼び起こすような形で道徳の授業の中で活用したり、課外の読み物として「人間の幸せ」「人間の生き方」を考えさせたりする上で参考になるような読み物を作りたいという願いを前々から抱いていたが、忙しい学校の現場ではなかなか実現が困難であった。

楠亭先生没後百二十五年余りの歳月が流れているが、楠亭先生の伝記をまとめるとなると、資料が散逸していて、空白の部分が意外と多い。ただ「楠亭記」という短い文章で書かれたものが残ってはいるが、それも血の通った人間としての楠亭先生を伝えるにははなお不十分である。

人世において、人と人との出会い程大切なものはないが、それはただ、現在という狭い空間や時間に制約されるものではなく、時には千数百年も前の人との出会いが重要な意味を持つてくることがある。

現代の中国古典文学の研究では第一人者で特に杜甫の研究では最高の権威者といわれる吉川孝次郎博士が、自著である「杜甫私注」の前書の中で、千数百年前の杜甫の詩に対して、次のように述べておられるのが印象的である。

「少なくとも、これほど私をひきつけ、これほど私にわかりやすい詩人は、古今東西を通じて他にない。『妃匹の愛』、つまり両姓の愛情は、君も之を臣より得う能わず。父もこれを子より得う能わずと、司馬遷が「外戚世家」でいうような関係が、この詩人と私との

間にはある。尊敬ということばは、かえってよそよそしい。……」

と述べておられるが、まれには、こうした時代空間を超越した人と人との出会いが、大きな意義のあることが示されていて興味深い言葉である。

私にはそうした漢詩に対する深い素養もないが、楠亭先生の詩を読み、その考察を進めていく中に、身近な人として語りかけてこられるような気持ちになり、自分の余暇の総てをこのことに集中してまとめることに大きな喜びを感じた。

今まで誰も行った人のない道であるだけに、多くの苦勞もあり、不安もあるが、「盲蛇おじず」のたとえの通り、ひとつの大きな冒険にふみきったのである。

これが契機となって楠亭先生についての一般の方々の関心が高まり、新しい資料なども発見されて、より正しい楠亭先生像に迫ることができれば私にとってこれ程大きな喜びはない。

ある時には「良寛全集」を読んで、童話化された良寛禅師のイメージから脱して真に、人間として悩み苦しみながら成長していかれた魂の軌跡をたどって、越後の国上山の旧跡を訪ねた。そして、近くの山寺の和尚さんに山羊の乳をいただきながら、良寛禅師について伝えられていることを、あまり雄弁ではないが、越後なまりの言葉で語ってくれたのが、遠い思い出の中に浮かんでくる。やはりその人の人間性を追求するためには、机の上だけ

でなく、その人を育んできた自然環境や風土を抜きにしては考えることができない。特に楠亭先生には、そのことが強く感じられ、度々筑摩の地を訪ね、湖岸から眺めた風景なども目をつむると浮かんでくるほどの親しみの深いものである。

こうした状態から考えて、私は、楠亭先生自身の書かれた詩集をできるだけ忠実に解釈することによって楠亭先生の間像に迫ることができないだろうか、また、自然の風物を詠まれた詩はできる限りその場所に立って考察し、可能な範囲の追体験を試みることにしてきた。

一字一字疑問に思う文字は「草字苑」「難字大鑑」で検討したあと、諸橋轍次先生の名著といわれる「大漢和辞典」全十三巻を、それぞれ使って正しい解釈を導き出すように努力してきた。もともと漢詩にひかれて、古川孝次郎博士の「新唐詩選」や「杜甫私注」、東郷豊治著の「良寛全集」などを今まで暇にあかして、繰り返し読んできたことが、思わぬところで役立つことになってしまった。

然し、この仕事は口でいう程簡単なものではなく、やってみると、なかなか根気のいる仕事であった。忙しい校務を終えた後の余暇を利用してやっているため、仕事は何程もはかどらないことがあった。

楠亭記を読むと、楠亭の名声は、すでに四方に高く、教えを乞う者は、遠近を問わず、

その数いく百人の多きに達したのであるが、専ら家業のさまたげをなすを慮って、春夏は未明払曉をもつて行い、秋冬は薄暮夜宵をこれにあて、決して生業に支障を来すことのないよう心がけたと書かれている。遠く楠亭先生におよびもつかないが、この知行合一の精神は学びたいと思ひ、私なりに実践してきた。

先生の詩の中に、「読み尽くして西山に月落ち初む」「独り詩冊を把つて就睡遅し」の句がある。詩の一句一句を読み味わい、考察を加えている中に曉に及ぶことも度々あった。

このことから考えても、草深い田舎で十分な書籍もない環境の中で、しかも独力で、これだけの深い学識を得られるには、並大抵の努力ではなかったことが推察される。その点、手近に資料や良い参考書もふんだんにあって、やろうという意欲さえあれば勉学の機会に恵まれている現代人は誠に幸福である。だが、その反面、あまりにも恵まれすぎていることが、かえって勉学の意欲なり努力を現代人から衰退させる結果になってしまったのは何と皮肉なことであろう。

知識の面では、日進月歩の科学の進歩に合わせて新しい知識を吸収することが大切であるが、人間の精神的な面では、やはり過去の人々の生き方なり、考え方に学ぶべき多くのものがあることが痛切に感じられた。

## 二、楠亭先生の考え方と現代性

楠亭先生は湖東の聖人と仰がれ、自分の生まれ育った筑摩の自然を深く愛し、終生この地を離れず、農業に従事するかたわら門弟の教育を行つてこられたのである。

ちょうどこれと同じ頃、伊吹山の松尾寺の提和尚について、易学、法相の学を修め、幕末の農政改革の面でもめざましい活躍をした大原幽学先生も同じ坂田郡におられ、時々山を下つて楠亭先生を訪ねておられる。

その生き方において全く対蹠的な活動をされ、優れた業績を残された二人の偉大な人物が、時を同じうしてこの坂田の地におられたことは興味のある問題である。大原幽学先生は武士の出であるだけに、その前半生は地方の名家や富豪の家を渡り歩いて見聞を広めているが、根本的には他家に寄食して浮き草のような生活しておられる。

楠亭先生は、これとちがって自ら鋤をとって耕し、生産活動に従事しながら、その間に門弟の教育をされ、彦根藩から藩儒としての再三の招きも一切固辞して農民としての生活に甘んじ、筑摩の大自然の中で、人間としての真実の道を求めて実践に務めてこられたのである。武士としての生活とほこりを最後まで捨てなかつた大原幽学先生と、一方農民と

しての生活に徹した一生を送りながら、しかもいたずらに高い理想を追わず自己に与えられた環境の中で絶えず人間としての道を可能な限り高め、深めていかれた楠亭先生の生き方は一見平凡に見えて凡人としての我々に身近で親しみやすい面がある。

この生き方は、「人間とはどのように生きるべきか」また、「どのように生きることが、真の幸福につながるものであるか」といった、我々人間が、この世の中を生きぬいていくための根本的な問題について、具体的な姿で、身をもって示しておられる。

この生き方に根底に流れる精神は時代を超越して現代社会に生きる子どもたちにも訴えるものがあるのではないだろうか。

過日も新聞紙上で、高校進学率が全国平均九十四パーセントという文部省進路調査が三面トップに七段抜きで大きく掲載されているすぐ横に、これもまた負けぬ位大きな見出しで「未成年自殺、五百人を越す」「今年の前半、小、中学生倍増」という警察庁調べが発表されている。

年々上がっている高校進学率（全国平均）の向上という、国民全体が高学歴への階段を歩んでいるのに比べ、まるでその後を追うかのように、学校や家庭問題に悩んで死に急ぎをする子どもが確実に増えつつあるという実態が、黒い影を投げかけている。

いったいこの問題はどこに原因があるのであろう。「社会のひずみ」といえば、それまで年々上がっている高校進学率（全国平均）の向上という、国民全体が高学歴への階段を歩んでいるのに比べ、まるでその後を追うかのように、学校や家庭問題に悩んで死に急ぎをする子どもが確実に増えつつあるという実態が、黒い影を投げかけている。

だが、その自殺の原因となるものを検討してみると、先生や友だちとのつきあい、成績、進学など、学校にからんだ悩みとみられるものが、全体の四分の一を占めている現状である。

気にいらぬと、簡単に家出をしたり、自殺をしたりする現代の子どもの心理は、裏返すと、自分の生命も粗末にするかわりに、「他人の生命を奪うのも平気である」という恐ろしい行為にもつながる。

これにはいろいろな原因もあり、単純には解決のできないものもあるだろうが、小さい時から自分を見つめ、自分の生活を豊かにしていく態度を、児童の発達段階に応じて徐々に積み上げていけば、その何分の一かは解決できるのではないだろうか。

それには、まず、先人の優れた生き方を謙虚に学び、自分のかけがいのない一生を悔いのない充実したものにしていく工夫と努力が大切である。

楠亭詩集を読んでいて特に心を打たれるのは、人と人とのつながりを大切にしておられた点である。マスコミの発達していない当時としては、著名な人にじかに会ってその学説なり意見を聞いたりするよりほかに、有効な学習の方法がなかったのである。そのため道を求める人は、千里の道も遠しとせず、その門をたたき教えを乞うたのである。

時代そのものが、のんびりとしていた時代で、今の感覚で判断することはできないが、

小野湖山や、彦根藩の儒管である野村東臯が訪れた時、心から喜びと、質素な中にもあたたかい接待をしておられることや、月沢上人を迎えての歓談など、人情の細やかな楠亭先生の一面と、豊かな人間性がうかがえる。

科学的な文化も発達していない、物の乏しい時代ではあったが、人情が厚く、精神的には最も充実した一生を送られたことがわかる。

### 三、楠亭先生を生んだ風土と時代相

楠亭記によると、

「寛政十二年 申の年（一八〇〇年）山紫湖碧、細波岸を洗い、鴛鴦渚に浮かぶ湖畔のと記されている。正に筑摩の自然の情景を誠によく表現されている。「鍋かむり祭り」で有名な筑摩神社の森を中心として、大きく湾のようになっている。ここがもと入江村と呼ばれたのも、こうした土地柄によるものである。その入江の浜伝いに行くと、ややつき出したみさきのようなところがあり、そこを通りすぎると、更に小さな入江がひろがり、右手

に湖岸に沿って点在する部落が見えてくる。これが楠亭先生を生んだ筑摩である。更に左手前方に美しい松林が見えてくる。ここは昔、朝妻港として栄えたところで、楠亭先生を訪れた客もここに上陸し、また、先生に見送られてここを去って行っていったのである。」「竹園師湖中を帰るを送る。」の詩は、この時の情景をうたったものであろう。

楠亭先生の住んでおられた住居のあととは、部落の中央で見えるから旧家らしいどっしりとした門構えの家である。門を入れてすぐ右手に小さな祠があるが、これは、当主の渡辺文雄氏が、楠亭先生遺愛の楠の大木が枯れたのを惜しみ、その材で楠亭先生の像を刻み祭つてあるとのことである。

当時、屋敷の隅に数百年を経た楠の巨木があり、筑摩の部落の手前からそれが眺められたことが、小野湖山の詩や「楠亭記」にしろされている。その木の傍らに、楠亭先生が家産を弟に譲って、専ら門人の教育をされた小さな家があった。昔はそこからすぐ横が湖岸の砂浜に続いていたが、今は彦根から長浜に向かう湖岸道路になっていて、自動車がひっきりなしに通る、当時の面影は全く見られない状態である。

然し、比良連峰を遠く望み、右手は竹生島が波の上に浮かび、左手に船の形をした多景島とその向こうに沖の島も見られる。入江と砂浜と松の緑やみさきの交錯した雄大な風景

は見るものの心を引きつけて止まない。

また部落の横を流れる堀割には、半ば朽ちかけた破舟が浮かび、早春の頃、木々の芽がいつせいにふくらみ、猫柳の白い綿毛が水に映じている風景は正に一幅の絵であり、新唐詩選に出てくる情景を彷彿とさせるものがある。

筑摩の部落は、自然が開発の波に乗って破壊されてきているとはいえ、まだまだ豊かな自然の息吹が感じられる、そんな部落である。

楠亭先生の産まれた時代、寛政十一年は、十一代將軍家齋の頃で、日本の周辺がようやく騒然となり太平の睡りから醒めようとしている時である。

林子平が「海国兵談」をあらわして幕府に罰せられている。また、高田屋嘉兵衛がエトロフ航路を開いたり、伊能忠敬の蝦夷地測量を行った頃である。

楠亭先生の家は代々造り酒屋を営みながら、農業を行ってきた。造り酒屋といえば、その村でも裕福な家であり地方の資産家が多かった。中には極道息子がでたり、経営不振でつぶれる家があっても、それらは例外である。

楠亭先生が農家であるとはいえ、裕福な造り酒屋の子として育ったことが、後の学問形成の上で、大きな影響があったと考えられる。当時の一般農家の経済状態からみて、たとえ才能があつたにしても、貧農の子であれば、その機会は与えられないままに終わり、楠

亭という偉大な人材は花を開き育たなかったのではないだろうか。

そうした時代相、筑摩の诗情豊かな自然環境などを充分にふまえた上で、本論である楠亭先生の漢詩の考察に入りたい。

この楠亭詩集として伝えられているものは、楠亭先生が自身で編集されたものではなく、書簡の裏や、反古などに書かれていたのを、昭和二十二年に当時、彦根工業学校の国漢の教師をしておられた西川哲雄先生が、集めて残されたもので、現在襖、額、掛軸等に数点あるのを見せていただいた。また、墓碑銘なども風化がひどく直接判読が難しい状態である。楠亭先生の日記、直接教授に使用された資料等は、現在何も残っていないが、その原因の一つとして、明治二十九年にこの地方を襲った大風水害の際に、先生の遺品、遺稿等の多くが流失、消滅したといわれている。確かにそれも原因の一つに上げられるかもしれないが、あるいは、先生自身が後代に残すことを考えられず、最初からまとめたものを作ることは考慮に入れておられなかったのかもしれない。そのため、作詩の年代は不明である。ただ、原文や本の欠字や不明箇所については、□で表記している。



#### 四、漢詩の考察

新春を寿ぐ

其一

堯徳巍々弘化春  
 乾坤何物不帰仁  
 年豊有瑞今朝雪  
 併祝昇平開序辰

堯徳巍々たり弘化の春  
 乾坤何物か仁に帰せざる  
 年豊の瑞有り今朝の雪  
 併せて祝す昇平開序の辰を

○堯徳 ギョウトク 古の聖天子堯の徳。  
 ○巍々 ギギ 高くおおいさま。

#### 【解釈】

古の堯の聖天子時代に比べられるような、高く、大きな徳に満ちた弘化の春。天地の総てが、この恵みに浴さないものはない。  
 今朝のこの雪も、豊年のめでたいきざしである。めでたさが重なって、あわせて新しい年のはじめの太平を祝うとしよう。

#### 【考察】

あたり一面、雪につつまれた平和な新年の情景である。雪は豊年のしるしとして農家の人々が喜んだものである。

粗末な草ぶきの農家も新雪につつまれて、今日ばかりは華やいで見える。湖岸に立つてあたりの風景を眺めると、鏡のように静まりかえった湖面と、その向こうの対岸には、雪をいただいた山並みが、一種の荘厳な姿で迫ってくるようである。右手の湖面に竹生島が浮かび、左手に船がこちらに向かって進んでくるような形の多景島とその向こうに沖の島も、ぼんやりと島影が見える。遠景、中景、近景と、それぞれ入りまじって微妙な色彩の変化を見せて水に映っている風景、それらは太平の世を、心から祝っているように感じられたものである。

其二

相遇相逢賀吉辰  
 満堂無客語艱辛  
 非唯天意調人意  
 徳教能令風俗淳

相遇い相逢うて吉辰を賀す  
 満堂客艱辛を語るもの無し  
 唯天意人意を調ふにあらざす  
 徳教能く風俗をして淳ならしむ

【解釈】

会う人ごとに、年賀のあいさつを交わしている。神社の拝殿につめかけたいっぱいのお客様も今日ばかりは、日ごろの不平やぐちをいう者もなく、神妙な顔をしている。ただ天意がどうか、民の意向がどうのと、とり上げて論ずる者もなく、徳の教えが人々の心を淳化しているためか、おだやかな平和を楽しんでいる。

【考察】

正月には、早朝、暗い中から神社に初詣をすることがならわしとなっていて、楠亭先生の住居のあった筑摩には「鍋かむり祭り」で有名な筑摩神社がある。遠く延喜式にもその名を列ねる郷社として由緒ある古い神社である。

ちようど、楠亭先生の住居から千メートルも離れているだろうか、美しく弓なりに湾曲した入江の湖岸ぞいの道を彦根に向かって進むと、幾抱えもある老松が、浜風にたわめられた風情のある枝を砂浜に向かってさしのべている。その松並木の続く参道の奥を左手に折れ曲がったところに、深い木立に囲まれて本殿と拝殿がある。

満堂というのは、そのの拝殿とみるのが妥当ではないかと思われる。そう考えると、参拝を終えた人とこれから詣でようとする人との、参道のあちこちで顔を合わせて、改まった新年のあいさつ交わし合っているのは、よくみかける正月の風景である。

太平の世を寿ぐ庶民の願いや姿までも目に浮かんでくるような詩で、素朴な中にも華やいだものを、ほのぼのと感じさせる詩である。

其三

非<sub>ニ</sub>是<sub>ニ</sub>尋<sub>ニ</sub>常<sub>ニ</sub>一<sub>ニ</sub>様<sub>ニ</sub>春<sub>ニ</sub>  
 天<sub>ニ</sub>降<sub>ニ</sub>瑞<sub>ニ</sub>雪<sub>ニ</sub>属<sub>ニ</sub>嘉<sub>ニ</sub>辰<sub>ニ</sub>  
 無<sub>レ</sub>辺<sub>ニ</sub>物<sub>ニ</sub>色<sub>ニ</sub>如<sub>レ</sub>舒<sub>レ</sub>軸<sub>ニ</sub>  
 不<sub>レ</sub>盡<sub>ニ</sub>年<sub>ニ</sub>光<sub>ニ</sub>似<sub>ニ</sub>轉<sub>ニ</sub>輪<sub>ニ</sub>  
 已<sub>ニ</sub>見<sub>ニ</sub>仁<sub>ニ</sub>恩<sub>ニ</sub>及<sub>ニ</sub>魚<sub>ニ</sub>鳥<sub>ニ</sub>  
 方<sub>ニ</sub>知<sub>ニ</sub>德<sub>ニ</sub>化<sub>ニ</sub>浹<sub>ニ</sub>民<sub>ニ</sub>人<sub>ニ</sub>  
 吾<sub>ニ</sub>儕<sub>ニ</sub>竊<sub>ニ</sub>朴<sub>ニ</sub>茅<sub>ニ</sub>茨<sub>ニ</sub>下<sub>ニ</sub>  
 将<sub>ニ</sub>知<sub>ニ</sub>昇<sub>ニ</sub>平<sub>ニ</sub>歌<sub>ニ</sub>頌<sub>ニ</sub>新<sub>ニ</sub>

是<sub>レ</sub>れ<sub>ニ</sub>尋<sub>ニ</sub>常<sub>ニ</sub>一<sub>ニ</sub>様<sub>ニ</sub>の<sub>ニ</sub>春<sub>ニ</sub>に<sub>ニ</sub>非<sub>ニ</sub>ず  
 天<sub>ニ</sub>瑞<sub>ニ</sub>雪<sub>ニ</sub>を<sub>ニ</sub>降<sub>ニ</sub>ろ<sub>ニ</sub>し<sub>テ</sub>嘉<sub>ニ</sub>辰<sub>ニ</sub>を<sub>ニ</sub>属<sub>ニ</sub>し  
 無<sub>レ</sub>辺<sub>ニ</sub>の<sub>ニ</sub>物<sub>ニ</sub>色<sub>ニ</sub>軸<sub>ニ</sub>を<sub>ニ</sub>舒<sub>ニ</sub>ぶ<sub>ル</sub>が<sub>ニ</sub>如<sub>ニ</sub>し  
 盡<sub>キ</sub>ず<sub>ニ</sub>年<sub>ニ</sub>光<sub>ニ</sub>轉<sub>ニ</sub>輪<sub>ニ</sub>に<sub>ニ</sub>似<sub>ニ</sub>たり  
 已<sub>ニ</sub>に<sub>ニ</sub>見<sub>ニ</sub>る<sub>ニ</sub>仁<sub>ニ</sub>恩<sub>ニ</sub>の<sub>ニ</sub>魚<sub>ニ</sub>鳥<sub>ニ</sub>に<sub>ニ</sub>及<sub>ニ</sub>ぶ<sub>を</sub>  
 方<sub>ニ</sub>に<sub>ニ</sub>德<sub>ニ</sub>化<sub>ニ</sub>の<sub>ニ</sub>民<sub>ニ</sub>人<sub>ニ</sub>に<sub>ニ</sub>浹<sub>ニ</sub>き<sub>を</sub>知<sub>ル</sub>  
 吾<sub>ニ</sub>が<sub>ニ</sub>儕<sub>ニ</sub>は<sub>ニ</sub>茅<sub>ニ</sub>茨<sub>ニ</sub>下<sub>ニ</sub>に<sub>ニ</sub>竊<sub>ニ</sub>す  
 将<sub>ニ</sub>に<sub>ニ</sub>昇<sub>ニ</sub>平<sub>ニ</sub>歌<sub>ニ</sub>頌<sub>ニ</sub>の<sub>ニ</sub>新<sub>ニ</sub>なる<sub>ニ</sub>を<sub>ニ</sub>知<sub>ル</sub>べし

○茅茨 ボウシ ちがやといばら、共に屋根をふくの用いるもの、質素な家のたとえ。

○儕 サイ 同輩、おなじ仲間。

○竊 セチ、セツ ぬすむ、ひそかにとる。

○朴 ボク 木の皮。

○昇平 ショウヘイ 太平、平和な世の中。

【解釈】

今年の新春は、例年と同じものではなく、その証拠に天はめでたいしるしの雪をふらせて喜び祝っているかのようである。

はてしない時の流れは軸をひろげて眺めているようなもので、めぐりくる年月は、ちょうど回転する大きな輪に似て止まるところを知らない。

すでに、深く広い恵みは魚や鳥にまでも及んでいる。まさに徳化が人民の一人一人にまねくいきわたっていることが解る。

我々の仲間たちは、木の皮、茅茨でふいた粗末な家の下でひっそりとそれを迎えている。まさに太平の御代をほめたたえる歌の、ここに新たなるものが認められる。

【考察】

新年のめでたさを歌っているが、題材の関係で、やや型にはまっていて、大自然に対して歌われたような、あの格調の高い、のびのびした雄大な表現は見られない。それに、推考の原稿でもあるので重複するところもみられる。

其四

四海文明同日新

四海文明同じく日新たなり

万邦和気等天均  
万邦ばんぼうの和気わき天均てんきんに等し  
恵風吹返君王化  
恵風けいふう吹かえ返かえる君王くんおうの化か  
不懐三皇五帝春  
三皇さんおう五帝ごていの春はるを懐おもわず

○天均 テンキン 天鈞に同じ、是非を通して等しくする理、自然平等の理。

○恵風 ケイフウ 恵みの風、物を成長させる風、君恩のたとえで、広く行きわたるのを風にたとえている。

○三皇 サンオウ 伏羲、神王、黄帝。

○五帝ゴテイ 帝堯、帝舜の前に、少昊、金天氏、顓頊高を併せて五帝という。

【解釈】

四海の国々の文明は、日々たゆみなく進歩発展している。総ての国々の平和な気分は、等しく平等に分け与えられている。ちょうどそれと同じように、万物を育み生成させる恵みの風は君恩と化して吹いてくる。こうした平和な世に生を受けて、どうしてあの、古代中国の聖天子と仰がれている、三皇や五帝の世をあこがれる必要があるろう。(自分はこの世に満足している)

【考察】

当時、船の便もよかったこともあり、楠亭先生の名声を伝え聞いて、日本全国の著名な

人々が楠亭先生を訪ねている。その中には渡邊華山や柳川星巖などの進歩的な学者もあり、時代の流れや思想についても、かなり深い知識をもっておられたことがうかがえるが、楠亭先生の性質から考えても、そうした急進的な考え方には同調できなかったたのである。また一つは、晩学であったため、血気さかな連中と行動を共にするには、年を取りすぎておられたのではないだろうか。

現実の平和な世に感謝し、幕藩体制を謳歌しているかのようなのであるが、当時の常識としては、まだ太平と鎖国の眠りの中にあつたのである。

### 其五

杯酒盤肴表素淳  
一妻三子等相親  
豫期弘化豊隆澤  
附興東風浴細民  
○素淳 ソジュン 飾り気のない質素なもの。  
○附与 フヨ さづけ与える。  
○細民 サイミン 貧しい民、恵まれない人。

杯酒盤肴素淳を表す  
一妻三子等しく相親しむ  
豫め期す弘化豊隆の澤  
東風に附与して細民に浴す

### 【解釈】

杯の酒とお膳の肴は、質素で飾り気はないが、妻と三人の子どもたちと楽しく新年を祝えるのは幸せである。

この弘化の新しい年も、ますます栄えることを今から期待しよう。そして、その恩沢を東風（春の風）に授け与えて、恵まれない貧しい人々にまでも、あまねく、行きわたらせたいものである。

### 【考察】

一見平凡な詩のようであるが、楠亭先生の人間性が素直に表現されていて、味わい深い詩である。ささやかながらも、親子五人が、平和な新春を祝えることを心から喜び、感謝し、あわせて、国家社会の興隆を祈ると共に、その恩沢が恵まれない人々の上にもあまねく行きわたることを祈っておられる。

墓碑銘によると、配偶者は河村氏の出である。渡辺文雄氏の話では、美濃の人というだけで名前も解っていないとのことである。

二人の男の子と、一人の女の子があつたと記されているが、詳細は解っていない。この詩を読む限りでは、夫婦仲も円満で、子宝にも恵まれ、幸福な家庭であつたことが想像される。

現代のマイホーム主義者のように、自分の家庭さえ良かったら、他人のことはどうでもよいといった狭い考え方ではなく、国家社会という広い立場から、恵まれない人々の上にも温かい配慮をしておられる点、楠亭先生の人間性がうかがえて興味深い。

其六

不<sub>レ</sub>啻<sub>二</sub>清平樂長民<sub>一</sub>  
ただ せいへい ぐちやう たみのみならず  
梅心柳意喜津々  
ばいしんりゆうい きしんしん  
可<sub>レ</sub>知時物迎<sub>レ</sub>年改  
知るべし じぶつ 年の改まるを むか  
豈莫<sub>二</sub>文華逐<sub>レ</sub>日新<sub>一</sub>  
あに ぶんかひ 逐うて 新なるなからむや  
○啻 テイ 打ち消しや反語をともなつて、それだけでなく、そればかりかの意。  
○清平 セイヘイ 山東省高唐県の西南の町。  
○津津 シンシン たえずわき出るさま。

【解釈】

世の中が、平和に治まるということは、ただ、清平、樂長の民が、その世を謳歌したという故事だけでなく、梅や柳のような植物のはしばしに至るまで、喜びが絶えずわき出

いるようである。

このようすを見ても、総ての事物が、改年を迎え喜んでいることが解る。こうした平和な世の中であるのに、どうして文化が日を追うて新たなになり、進歩しない道理があるうか。必ず新しい世の中は進歩発展するものである。

【考察】

弘化改年の年はよほど印象の深い年であったのか、幾つもの詩を作っておられる。温厚な性格から現体制を批判し、革命といった直接行動に結びつく過激な思想は楠亭先生にとって無縁のものであった。筑摩の穏やかな自然の中で生活してこられた先生にとっては、何も好きこのんで血なまぐさい渦中に身を投じる必要も感じなかったのではないだろうか。

庚戌元日  
寂寞茅堂隔<sub>二</sub>俗塵<sub>一</sub>  
せきぼく しょうどう ぞくじん へだ  
閑身漸<sub>二</sub>覺<sub>二</sub>物光新<sub>一</sub>  
かんしん ぜんく ぶつこう あらた  
林催<sub>二</sub>黄鳥<sub>一</sub>當<sub>二</sub>杯<sub>レ</sub>酒  
はやし こうちゆう もよお  
蜜對<sub>二</sub>青山<sub>一</sub>是<sub>二</sub>故人<sub>一</sub>  
みつ たい せいざん たい こじん  
伊昔鳴<sub>レ</sub>鞭入<sub>二</sub>燕市<sub>一</sub>  
い せき なる びち へい  
かのえいぬ げん じつ  
寂寞 茅堂 俗塵を隔つ  
閑身 漸く 物光 新なるを覚える  
林は黄鳥を催して 当に酒杯むべし  
密に青山に対すれば 是れ故人なり  
伊の昔 鞭を鳴して 燕市に入る

而今尋<sub>レ</sub>句過<sub>二</sub>江涓<sub>一</sub> 而も今<sub>いま</sub>句を尋ねて江涓を過ぐ  
昇平此日歎<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>極 昇平<sub>しやうへい</sub>此日<sub>このひ</sub>歎極<sub>たんごく</sub>まりなし  
況<sub>二</sub>値<sub>一</sub>梅花細雨春 況<sub>いは</sub>んや梅花<sub>ばいか</sub>細雨<sub>さいう</sub>の春<sub>はる</sub>に値<sub>あた</sub>うおや

○庚戌 カノエイヌ かのえいぬの元日は、一八五〇年にあたる。

○寂寞 セキバク 先生五〇才で、作詞の年代からみると晩年の作である。

○青山 セイザン ひっそりともものさびしいようす。

○伊殿 イイン 埋骨の地、墳暴の地。

殷の賢相、名は勢。

はじめに、野に耕していたが、湯のたびたびの招へいによって、出で湯の相として天下の王たらしめた。湯の崩後孫の太甲が無道であったため、伊殿はこれを桐宮に放ち、其後三年、太甲の悔悟するに及び、また毫に帰したという故事による。

○燕市 エンシ 燕の町、燕の都城。

○江涓 コウカン 江のほとり。

#### 【解釈】

ひっそりと静かなこの草堂は、浮世の塵やよごれをさえぎってくれる。自然を相手とし

ている閑な身にも、何かしら、まわりのものが、新しいものに思われる。林の中では、うぐいすの声も聞かせてくれて、ちようど酒を酌み交わすのに都合がよい。

そっと、林の奥の墓地に向かい会ってみると、皆、幽名を隔てた故人ばかりである。

伊の昔、鞭をならして燕市に入ったが、今は太平の世の中で、新しい句を作るために、江のほとりを、さまよい歩いた新唐の詩人と同じく、この太平の世を祝おう。

新しい年のこの日のめでたさと喜びはつきない。

まして梅の花に、春の細い雨が降り注いでいる風情は、なお格別である。

#### 【考察】

楠亭先生は、この詩をよまれてから三年後になくなっておられる。この詩はおもいなしか、前に出ている元日の詩と比べて元気がないように感じられる。また、平和の御代をたええるという希望に満ちた新春という感じもやや乏しいようである。

この原因の一つとして、この時代というものを考えてみる必要がある。楠亭先生を尋ねて、筑摩へやってきたこともある渡辺華山が捕らえられて自刃するし、高野長英が幕吏に追われて諸国を逃げ回っていたが、この年の十月遂に非業の死を遂げるのである。楠亭先生とは八才余り年上である。こうした重苦しい時代の圧力に、楠亭先生も無関心ではいられなかったであろう。

「密かに青山に対すれば、是故人なり」の句の中には、一度はこの筑摩の地を訪れたことのある人や、親しかった人もすでに故人になってしまっていることなどに思いをはせてよまれたものであろう。

春 草  
其 一

已消残雪發新榮  
未識芳容奇異名  
白鷺洲前波欲動  
黃鳥苑裡雨初晴  
青揺苒々無窮思  
翠流萋々何限情  
自為陳根存不絶  
年々春意見生々  
○新榮 シンエイ 新生の草の萌え出るさま。  
○芳容 ホウヨウ 美しい姿、他人の容貌。

已に残雪消えて新榮を發す  
未だ知らず芳容奇異の名を  
白鷺の洲前波動かんと欲す  
黄鳥苑裡雨初めて晴れる  
青揺苒々窮なきの思  
萃流萋々何ぞ情を限らんや  
自から陳根となりて存して絶えず  
年々春意生々として見はる

- 黄鳥 コウチョウ うぐいす。
- 苒々 ゼンゼン 草の盛んにしげるさま。
- 萋々 サイサイ 草の盛んなるようす。
- 陳根 チンコン ふるい草の根。

【解釈】

琵琶湖を取り巻く山々の残雪は消えて、草木はいつせいに萌え出ようとしている。  
この美しい姿の美人の名を未だ聞いたことがない。(琵琶湖の美しい風景を、美人の容貌にたとえている。)

白鷺が、洲の前において餌をついばみ、それに波が打ち寄せようとしている。どこかの庭先から、うぐいすの声がして、雨もようやくやくなり、晴れ間も見えてきた。  
岸辺の草木の新緑が、生々として果てしなく榮えていく思いがする。  
青くすみきった流れは、こんこんと無限の詩情をかきたてている。  
古い草木の根から、自然に新しい芽が力強くふき出している。年々めぐってくる春の、この趣は生々として目をみはるものがある。

【考察】

恐らく、天の川尻の洲とつき出た湖岸の風景を見てよんだものであろう。雨上がりの新

緑の美しさと、渺茫とひろがる琵琶湖と、その上に低くたれた雨雲、それらをバックにして白鷺が洲に下りたつて餌をついばんでいる。

「波欲動」の表現、これこそ静と動の瞬間をとらえて妙を得たものである。

この詩を頭の中に描いてみるだけでなく、楠亭先生の住居のあとに立って、湖岸の風景を、自分の膚で感じる時、この詩がいつそう切実なものとなってくる。

この詩を読んでいると、「新唐詩選」の中に出てくる杜甫の詩、「江は碧にして、鳥はいよいよ白く、山は青くして花は燃えんと欲す」とどこか似通ったものがあり、情景の鮮明な美しさが感じられ、味わい深い詩である。

中国の揚子江の河幅は、ちょうど筑摩とその対岸の舟木崎の距離に相当することから考えて、湖とはいえ、中国大陸の大河と同じイメージが浮かんでくるのも偶然の一致とはいえ、面白い。

## 其 二

細草青々日自栄  
春風不要一分名  
煙從地上那邊散

細草青々として日に自ら栄ゆ  
春風を要めずして一名を分かつ  
煙は地上に従つて那邊にか散じ

雨到窓前幽處晴

雨は窓前に到つて幽処晴る

心跡欲尋周子意

心跡 周子が意を尋ねんと欲して

夢痕猶想謝公情

夢痕 猶 謝公の情を想うが如し

寧依窮地坡陰老

寧ろ窮地に依つて埃陰に老いんよりは

寔向佳人階底生

佳人に向かうなくて階底に生ぜん

○佳人 カジン この場合美人の意味ではなく、主人のことをいう。

○周子 シュウシ 書名で呉周昭一卷を指している。

○謝公 シャコウ 謝安石の尊称である。情を丘叡（キユウガク）丘と谷は、隱者の住居をいう。

○埃陰 ハイイン どてのかげ。

○階底 カイテイ かいだんが一番下。

## 【解釈】

芽を出したばかりのかぼそい草々は、日に日に伸び榮えていく。春風は、それらを一々分け隔てをしないで、みな一様にあたたかく吹いている。

池の面をはうように立ちこめていた煙も、いつの間にか、どこかに散っていく。春雨は窓の面で音もなく降っていて奥深い静かなところも晴れてきているようである。



それはちょうど心の中では、周子という名前の難しい書物を読んで、その奥深い意味を探ろうと努力しながら、夢のあとかたでは、謝公の丘壑の情に心をひかれ、あこがれているようなものである。

むしろ、自由で隅に身を置いて、堤や物かげに身をひそめて、かくれて暮らしながら、いたずらに年をとるよりも、また主取りをねがおうと、人を押しつけて運動することを止め、一番最低の現在の地位に甘んじて生きていくことを願おう。

【考察】

単なる春のよろこびをよんだものではなく、比喻に、難しい語句や表現が使っているで、なかなか意味のつかみにくい詩である。

最後の二連は、渡辺崋山、高野長英、柳川星巖などの進歩的な考え方を持った人々の生き方を暗に指しているようにもとれるが、格別に深い思想を持つわけでもないのに、一種の流行のように広がってきた勤王、倒幕運動に対する批判とも受け取れる。

表現がなめらかで、中国の故事を自由自在に使ってある点、並々ならぬ学力がしのばれ、格調の高い詩である。

無題 其一

生<sup>ニ</sup>炯波<sup>一</sup>上風光動  
残雪山頭霞色新  
鳥性魚心如<sup>レ</sup>有<sup>レ</sup>得  
柳容梅姿似<sup>ニ</sup>相親<sup>一</sup>

炯波<sup>けいは</sup>生<sup>しょう</sup>ずる上<sup>うえ</sup>風光<sup>ふうこう</sup>動<sup>どう</sup>く  
残雪<sup>ざんせつ</sup>山頭<sup>さんとう</sup>霞色<sup>かしょく</sup>新<sup>あら</sup>たなり  
鳥性<sup>ちようせい</sup>魚心<sup>ぎしん</sup>得<sup>う</sup>る有<sup>あ</sup>るが如<sup>ごと</sup>し  
柳容<sup>りゆうよう</sup>梅姿<sup>ばいし</sup>相親<sup>あいした</sup>しむに似<sup>に</sup>たり

○炯波 ケイハ 明るい姿。

○柳容 リユウヨウ 美しい女性のたとえ。

○梅姿 バイシ 梅の姿にたとえている。

【解釈】

明るく光る波の上にも、春の気配が感じられ、残雪をいただいた山頂の辺りの霞の色にも、新しい春の息吹きがみられるようである。

鳥も活気を帯びてなき、魚の動きにも生き生きとして、まるで鳥や魚にも、人間のような感情があつて春の喜びを謳歌しているようである。

柳の姿や梅の枝までも、なかよく親しみ睦み合っている男女の姿のようである。

【考察】

「近江八景」の中に「比良の暮雪」がある。夕暮れのほのかな明るさの中に、比良山頂

の残雪が、静かな湖面に映って幻想的な美しさに誘い込まれていくような気持ちがある。  
楠亭先生の筑摩の住居から、ちょうど対岸の正面に比良山系の山波が眺められ、山すその輪郭は夕暗の中にとけこむように消えている。そして、残雪をいただいた山頂だけがポツカリと浮かんでいる風景は、まさに一幅の絵である。  
炯波という言葉が使われている以上、夕陽を受けて逆光に輝いているその明るさが周りの夕暮れの暗さの中で、山頂の残雪をよりいっそう引き立てている。万物が、春の生気にみなぎっている様子が、力強くうたわれている詩である。

其二

東風陣々 払<sub>二</sub> 塵埃<sub>一</sub>  
無盡藏 中 春色 開  
残雪 山頭 寒 半 減  
生<sub>二</sub> 炯波<sub>一</sub> 上 暖 初 回  
已 看 和 氣 先 揺<sub>レ</sub> 柳  
誰 使<sub>二</sub> 芳情<sub>一</sub> 早 開<sub>レ</sub> 梅  
○東風 トウフウ ひがしかぜ、春の風。  
とうふう ちんちん 東風陣々として塵埃を払い  
むじんそう なか しゆんしやくひら 無盡藏中 春色開く  
ざんせつ さんとう さむい はんげん 残雪山頭寒さ半減し  
けいは しゆう うえん だん 初めて回る 炯波生ずる上暖初めて回る  
すで み わき 先ず 柳を揺るがすを 已に看る和氣先ず 柳を揺るがすを  
だれ ほうじよう 誰か芳情をして早く梅を開かしむ

○塵埃 ザシツ ごぎの間にたまつたちり。

○陳々 チンチン ものが積み重なって古くなること。

【解釈】

春の風が古く積み重なったごぎの埃を払い、汲めども尽きることのない春の気配が、今ようやく開かれようとしている。

山頂の残雪も少なくなり、寒さも半減してきた。明るく輝く波の上にも、春の暖かさが巡ってきたようである。

すでに春の和らいだ大気が、柳の葉を揺り動かしているのを見る。誰か、かんばしい心で、早く梅の堅いつぼみを開かせなさい。

【考察】

長い冬ごもりから、ようやく解放されて、春の兆しが万物の上に現れ初めてきた早春の喜びをうたっている。

無尽蔵という言葉が、楠亭先生の詩によく出てくるが、この言葉は、蘇軾の赤壁賦に、「是れ、造物者の無尽蔵なり」の句を引用したものである。

楠亭先生の詩集を読んで、一番心をひかれるのは、早春をうたった詩であるが、この詩も、その一つである。最後に擬人的に結んである所が面白い。

其三

満天佳興大湖春  
 無盡藏中独笑人  
 残雪山頭寒半減  
 生烟水上暖初新  
 波添喜色開梅岸  
 風動和容渡柳津  
 已見東君何限意  
 方看藻底躍潜鱗  
 ○満天 マンテン 空いっばいの意。  
 ○佳興 カキヨウ よい趣き。  
 ○烟 エン 陽炎が上るようす。

満天の佳興 大湖の春  
 無尽蔵 中 独り人を笑わましむ  
 残雪 山頭 寒さ半減し  
 烟は水上に生じて 暖 初めて新なり  
 波は喜色を添えて梅岸に開く  
 風は和容を動かして柳津を渡る  
 已に見る東君 何ぞ意を限らむ  
 方に看る藻底 潜鱗を躍るを

【解釈】

空いっばいに展開する琵琶湖の、のどかな春の趣き、こうした汲めども尽きぬ天地の恵みの中に、ただ一人いると、自然に微笑がわいてくる。対岸の山頂に残る残雪を眺めていると、寒さも峠を越して、一時の厳しい寒さに比べると、半減したかのように感じられる。

湖水の上にはかげろうが立ち、暖かさが、そこから生まれてくるようで、新たな気分がする。  
 波は春の喜びを添えるかのように、梅の花の咲いている岸に打ち寄せている。風はおだやかに、船場近くの柳の小枝をゆり動かして吹き渡っていく。

もはや、春の女神は、総てのものに分けへだてなく恵みを与えている。また、足元に目を転じると、近くの湖底では、今まで藻の中に眠っていた魚が動き出して鱗がキラキラと光り踊っているのが見える。

【考察】

湖北の冬は厳しく、雪国を思わせるものがある。楠亭先生の住んでおられた筑摩は、湖岸にあるため、雪は少ないが、さえぎるものない北風は、まともに吹き付けて、その寒さは格別である。

こうした、長い厳しい寒さの後に迎える春の自然の恵みは、ひとしおのものがある。湖水の水もぬるみ、その上には陽炎が立っている。湖岸に住む人々には、総ての春の暖かさが、まずそこから生まれてくるように感じられたのである。さざなみがゆるく岸に打ち寄せ、その岸辺には梅の花が咲きにおっている。

春の女神が、具体的な姿をかえて、いろいろなところから、そっと忍び寄ってくる。

楠亭先生の詩は、繊細でイメージ化しやすいものが多く、読んでいる中に、写真のフィルムの一コマのようにその情景が目に見えかんでくる。読み返す度に心の中までも暖かくなってくるような詩である。

### 大洞 春景

太平有<sup>レ</sup>象 洞門 春

たいへいしやう あり とうもん はる

江上 山間 歌舞 人

かうじやう さんかん かぶひと

喜見 東君 恩沢 遍

よろこび みる とうくん おんたく あまね

千紅万紫 照<sup>レ</sup>顔 新

せんこうばんし 顔を照らして 新たな

○大洞 ダイドウ 天と地と一体になる。差別をつけず、よく同化する。

○洞門 ドウモン ほら穴の入り口、そこに設けた門戸。

○東君 トウケン 太陽。春の女神。

○歌舞 カブ 歌い舞うこと。

○千紅万紫 センコウバンシ 多くの花の紅と草木の数多くの色。

### 【解釈】

世の中が安らかに治まっている徴しのように、平和な早春であることよ。湖の上にも、

山あいも、総てが歌い舞う人のように、うきうきとしている。

春の女神の恩沢が、あまねく行きわたっていることの喜びを、目の当たりに見るようである。数多くの花の色と、草木の色が顔に照り映えて新たな気持ちがある。

### 【考察】

雪の解けるのを待ちかねて、まるで春の女神の先ぶれのように村々を訪れるものに、伊勢の大神楽がある。娯楽の乏しい当時の農村では、奇術、万才、サーカスのミックスされたこの一行の訪れを、子どもだけでなく、大人も待ち望んでいたのである。

特に造り酒屋などでは、縁起をかついで祝儀を奮発するので、ふだん大きな酒桶の干しである広場が、即席の野外劇場に早変わりすることもあった。楠亭先生の家も造り酒屋であったため、こうした催しもあったことだろう。

「歌舞の人」の句を、単なる詩の表現としてのみ、見るだけでなく、こうした生活との結びつきを考えてみる必要がある。

### 放吟

前 湾 昨日 已 無<sup>レ</sup>鷗

ぜんわん きのう すで かもめ

今日 前 湾 又 有<sup>レ</sup>鷗

きょう ぜんわん また かもめ

鷗 去 鷗 来 鷗 可レ畏  
かもめ 去り 鷗 来る 鷗 畏るべし  
 鷗 々々々々々々 鷗  
おうちゅうおうちゅうおうちゅう  
 鷗々々々々々々々 鷗

- 鷗 オウ かもめのこと。
- 畏 イ おそれること。

【解釈】

昨日は、私の前の入江には鷗の姿は無かったが、今日はその入江に鷗の姿がある。一羽が去ったかと思うと、また別の鷗が、あとからあとから、まるで波の間からわいてくるように何か恐ろしい物を感じる。

(無数の鷗の乱舞を、同じ鷗の語の連続で表現している。)

【考察】

青くすみきった群青色に展開する琵琶湖の湖面は、太陽の光線の角度によるものか、刻々微妙に変化する。そうした湖面と空の色をバックに、無数の白い鷗が群がっている風景を実によくとらえている。

ギラギラ輝く太陽の中での乱舞だろうか、また、雨上がりの重苦しい雨雲を背景としたものであるうか、ヒッチコックの監督した「鳥」という映画の中で、ふだん弱くて臆病な鳥が集団となると一変して狂暴なものとなり、人や家畜を次々と襲う場面があったが、「畏

るべし」という表現からすると、後者のほうがびったりするのではないだろうか。漢詩という一般的に考えられる堅い表現から脱却して、題材もすこぶる自由で、現代詩的な新しいスタイルでよまれているのに驚かされた。読んでいて、百二十年余り前の時代的なズレを全く感じさせないのには不思議である。

墨 梅

梅 花 筆 底 看ニ開 新ニ  
ばいか ひつてい かいしん をみる  
 能 奪ニ横 斜 疎 密 真ニ  
よ おうしや そみつ しん ち  
 餘 徳 幽 香 難レ画 處  
よとく ゆうこう えが なた ところ  
 詩 場 亦 悩 許 多 人  
しじょう また なや きよた ひと

- 筆底 ヒツテイ 筆の下、書くこと。
- 余徳 ヨトク 余分の利益、もうけ。
- 許多 キヨタ あまたあること。
- 詩場 シジョウ 詩を作る機会。
- 幽香 ユウコウ かすかな香り。

【解釈】

梅の花を書こうとして、新しく開いた花を見る。横に張っている枝、斜めに出ている枝、密生しているところ、まばらな枝等を、ありのまま写生した。

そして、余分の利得として、かすかな梅の香りのおまけまでついているが、この香りは何とも描き難い処である。

詩を作る機会があまり多くありすぎる人も、これまた悩みであることよ。

【考察】

盆梅が、ちらほらと咲き初めてきたので、その美しさについて誘われて紙を広げ、それを写生しようとしておられる楠亭先生の姿が、まず浮かんでくる。

姿や形の美しさだけでなく、馥郁たる香りのおまけまで味わいながら夢中で筆を走らせている時、楠亭先生自身恐らく人世の最も幸福なる一刻を楽しんでおられたのではないだろうか。

最後の句の「詩を作る心が、あまり多くありすぎても悩みである」といっておられるのも、裏返すと、風流人としての楠亭先生のひそかな自負心ものぞかせていて面白い。

渡辺文雄氏に、この詩のことを話すと、

「楠亭先生の、この梅の絵を知人が持ってきて見たことがあるが、ずいぶん昔のことであるので、思い出せない」とのことである。

門弟か知人に与えられたものが流れて、今もどこかに眠っていることであろう。筑摩か、その近辺の旧家には必ず残っているに違いない。

賞 梅（其二）

疎々 密々 淡濃 中

疎々 密々 淡濃の中

一 兩 三 枝 似 搏 風

一 兩 三 枝 搏風に似たり

水 墨 梅 花 無 俗 致

水墨 梅花 俗致なし

却 嫌 脂 紛 費 奇 工

却って脂紛を嫌い奇工を費す

○搏風 ハクフウ 風にはばたいて飛ぶこと。

○俗致 ゾクチ いやしくみにくい趣。

○脂紛 シフン ベに、おしろい。けしろう。

○奇工 キコウ めずらしい、すぐれた仕事。

【解釈】

密生している枝や疎らな枝を、墨の濃淡の中で書き分け、一本の枝とその両方につき出た枝は、ちょうどはばたく鳥に似ている。

水墨で描かれた梅の花は、俗っぽいやさしさがなくて高尚であり、ゴテゴテと色で飾り

たてることを嫌っているので、それだけに珍しいすぐれた表現の工夫に力が費やされる。

【考察】

現代の刺激の強い、大型化してきているレジャーの中で、水墨画の繊細な味わいが見直されてきている。墨一色で、遠近、高低、濃淡をすべて表現する水墨画は、東洋の優れた伝統的技法の一つである。

「人生を豊かに生き抜く」ことの意味を、この詩は教えてくれているようである。微妙な自然の変化や美しさを見逃さず、自分の生活の中に生かしていこうとする態度は全くうらやましい限りである。心を豊かにする材料は、我々の周囲にいくらでもあるのである。要はその人の心の持ち方であるということが示されていて、如何にも楠亭先生らしい詩といふべきである。

無題

芳樽	一別去帆風	<small>ほうそん いちべつ きょはんのかぜ</small>
万頃	春湖思不窮	<small>ばんけい はるみずうみおもまわらず</small>
翠柳	湾頭側身望	<small>すいりゅう わんとうしんかたむのぞ</small>
烟波	渺々夕陽中	<small>けいはひょうびょうゆうひなか</small>

○炯 ケイ 光り輝くさま。

○渺 ヲ ヲ ヲ ヲ ヲ ヲ 水の果てしなく広がっているさま。

【解釈】

香りのよい酒を積み込んだ船が帆に春風をいっぱい受けて去って行く。水面の極めて広々とした春の湖は、つかみどころのないので、作詞の想がなかなかつかみにくい。

船着場のしだれ柳の枝をよけて身を曲げるようにして眺めると、明るい波が果てしなく広がり、それが夕陽に輝いている。

【考察】

造り酒屋である楠亭先生の家で醸造された香り高い新酒が、船に積み込まれ、春風に帆をいっぱいにくらませて港を出て行く情景をうたったものである。荷主への事務的な手続きや、水夫、船頭、積み込人夫の手配など、忙しい仕事から解放されて、本来の先生にもどった時、順風に帆をはらませて去って行く船を眺めている中に鬱勃として詩情がわき起こってよまれたものだろう。

「万頃 バンコウ」は果てしなく広がる、空間的な広がりを示し、茫洋としてつかみどころのない広さをあらわしている。「身を側して望む」という、変わった構図の転換を通して春の湖をとらえようとしている点がおもしろい。

愚作

活発 天機 或 不 同

活発 天機 或いは同じからず

熟知 人事 拙 勝 工

熟知か知らん 人事の拙工に勝るを

閑存 擾々 紛々 際

閑は擾々紛々の際にある

逸在 勞々 役々 中

逸は勞々役々の中にあり

草蔓 全 從 心 所 欲

草蔓 全て心の欲する所に従う

柳條 長 任 物 無 窮

柳條 長を物に任せて窮りなし

春寒 送 到 東 家 酒

春寒を送り 到る東家の酒

笑看 梅花 二 月 風

笑って看る梅花 二月の風

○活発 カツパツ 天機の流動するさま。精神、行動の勢いのあること。

○天機 テンキ 自然にそなわっている、天の運行する機関。

○擾々 ジョウジョウ さわぎ流れるさま。

○紛々 プンブン 入りまじって乱れるの意。

○逸 イツ 楽しむこと、やすらかなこと。

○東家 トウカ 孔子の西隣に住した人が、孔子の聖人たることを知らなかつ

た。人を知る明なき人をいう。

【解釈】

自ら勢いよく行動することと、自然にそなわっている天の動きとは、似ているようであるけれども、実は同じものではない。

人間のやっていることの中で、世渡りは下手で愚直ではあるが誠実に生きる人が、要領よくたくみに動き回っている人に勝っている場合があるのを人々は知っているであろうか。

ひまは、入り混じって目まぐるしい動きの中で初めて見出されるし、楽しい安らぎは、汗を流して労働した後にはじめてやってくるものである。草や藁は、それぞれ自分の好む所に従って自由に伸びていくし、しだれ柳の枝の長さも、自然に備わった性質によって、窮まりなくのびていくようである。

冬の寒さを送り出すと、やがてそれにかわって、暖かい春の香りが運ばれてくる。

こうした自然の仕組みを眺めていると、梅の花に吹き付ける二月の冷たい風も、笑って見るだけの余裕がでてくる。

【考察】

この詩は、ただ単に、早春の自然をうたったものではなく、早春の自然を題材として、取り入れながらも、楠亭先生独自の人生観がのべられているのは興味がある。



この思想の根底に流れるものは儒学の天命思想である。

大自然のメカニズムは、一つの大きなリズムによって動いているのである。どうかすると、我々は目先のものに心を動かされ勝ちであるが、こうした自然の流れに逆らわず無理をせずに、巡ってくるチャンスを活かすことも大切である。

楠亭先生が子弟に教育された資料は具体的に残されていないが、これらの詩を考察していく中に、先生の教学の根本精神が、或程度汲み取れるのではないかと思う。自然の流れに逆らわず、じつと力を蓄え、巡ってくるチャンスを待つ心の余裕は、現在死に急ぎすぎる若者達や、その家族の人々も改めて見直してみる必要があるのではないだろうか。

不安定な心情の中におかれている小中学生に親身になって相談にのってやるためにも常に教師自身が、確固たる信念と、人生に対する深い洞察力を養っておくことが大切であることを教えていてくれるようである。

### 賞 梅

瘦藤 拄去江干立  
心醉梅花不覚寒  
可<sub>レ</sub>惜時人誇<sub>二</sub>假説<sub>一</sub>

瘦藤の拄去<sub>二</sub>江干<sub>一</sub>に立つ  
心酔<sub>二</sub>梅花<sub>一</sub>寒を覚えず  
惜しむべし時人の假説に誇るを

面真 □ 作<sub>二</sub>等閑<sub>一</sub>看  
面を真□し、等閑を作り看

- 拄 チュウ あげる、支えるの意。
- 江干 コウカン 入江のふち、ほとり。
- 仮説 カセツ 実際の証明によらないで、想像を混えてたてた説。
- 等閑 トウカン なおざりにするの意。

### 【解釈】

瘦せた藤の木が支えをとられ、湖のほとりにわびしく立っている。その近くには、梅の花が咲き匂っている。その美しさに心を奪われて寒さも感じない。今の時代の人々は、どうして、この美しいありのままの姿を詩や歌に現そうとしないで、頭の中の観念的な空想だけで詩や歌を作って自慢しているのだろうか。

(最後の連に欠字があつて意味が十分に汲み取れないのが残念である。)

### 【考察】

湖岸に近い梅林に咲き香る梅の花の美しさに心をひかれ、湖から吹き寄せる風はまだ膚寒い、その寒さが少しも苦にはならない。

梅の木の傍に藤の老木があり、その支え木も朽ち果てて、わびしく立っている。まだ冬の眠りから醒めることができず、まるで生命のない枯れ木のようなようである。寒さに負けずに

健気に咲き匂う梅の花と瘦藤と対比させているところが、情景をいっそうひきたてて、こ  
うした自然の美しさに目を向けず、写実を離れた観念的なものをもとに、歌や詩を作っ  
ている俳人や詩人に対して批判的である。ここにも自然をこよなく愛した楠亭先生の心情が  
よくあらわれている。

松尾芭蕉の新しい俳句の運動と相通じるものがあるが、楠亭先生の俳句が見当たらない  
ところをみると、俳句はやらなかったようである。漢詩も俳句も、芸術としてねらう本質  
は変わらないことを示しているようである。

泰不驕

泰にして驕らず

心境泰然知足閑

心境泰然足るの閑を知らば

自無災害到為患

自ら災害の患を為すに到る無し

満堂餘樂長春色

満堂の余樂長春の色

萬福花開積善山

萬福の花は開く積善の山

【解釈】

心境が落ち着いて物事に動ぜず、満足し感謝することを知ったならば、自ら災害を招く  
ということがない。

総ての家々の人々が、このような考えをもったならば、世の中は月季の花に似て、美し  
く楽しいものとなることであろう。そうなれば、幸福の花は、善行を積んだ山に美しく咲  
き香ることだろう。

【考察】

渡辺家の座敷と居間の欄間に掲げている先生自筆の偏額である。楠亭先生の人生観を知  
る上で貴重なものである。恐らく子弟を教育される教場か、湖水に面した亭に掲げてあつ  
たものであろう。

年表と対比してみると、北辺に外国の船が出没し、物情騒然として、国内の世論も尊王、  
攘夷論もようやく頭をもち上げかけている。こうした中で、自分の分を守り、つつましか  
かな幸福の追求を願う、楠亭先生の人間性がよくあらわれている。

無題一

瘠地從來最易荒

瘠地從來最も荒れ易し

耘鋤暫怠草蒼々

耘鋤暫く怠れば草蒼々たり

寄言年少田家子

言を寄す年少田家の子

莫使良苗為糝糠

良苗をして糝糠とならしむ莫れ

- 瘠地 セキチ 地味がやせていて、作物ができない土地。
- 糞糠 ヒコウ しいなとぬか。

【解釈】

瘠地はこれまで最も荒れ易いものとされている。手入れをしないで、しばらく怠けていると、草がぼうぼうと生い茂ってしまう。年少の農家の子どもたち、お前たちに言っておきたいことがある。せっかくよい才能に恵まれながら、自分から努力しようと思わず、あたら、よい才能を埋もれさせてしまつて、しいなとか糠といったくだらないものしか取れない結果になつてしまつてはいけぬ。若い時から、しっかりと目標を立て、それに向かつて絶えず努力しなさい。

【考察】

楠亭先生の常日頃から考えておられた教育目標の一つであると考えられる。早朝、薄暮と、遠近を問わず集まつてくる多くの子弟に対して、常にこうした態度で、或る面では厳しく或る面ではやさしく教え導かれたのである。

時代は大きく変わつてはいるけれど、現在の学校教育にも、この精神は生かしていかなければならないものがあるのではないだろうか。

無題二

莫<sup>レ</sup>謂<sup>二</sup>田家礼法疎<sup>一</sup> 謂<sup>レ</sup>うこと莫<sup>ナ</sup>かれ田家礼法疎<sup>セ</sup>なりと  
 夏畦終日苦<sup>二</sup>耘鋤<sup>一</sup> 夏の畦<sup>なつあぜ</sup>終日<sup>しゆうじつ</sup>耘鋤<sup>うんじよ</sup>に苦しむ  
 良家子弟何心地 良家の子弟<sup>りやうけ</sup>何<sup>して</sup>の心地<sup>こころ</sup>あつてか  
 飽<sup>二</sup>食膏粱<sup>一</sup>空逸居 膏粱<sup>こうりやう</sup>飽食<sup>ほうしょく</sup>して空<sup>ひな</sup>しく逸居<sup>いじきよ</sup>せんや

- 耘鋤 ウンジョ 土を耕し、すくこと。
- 疎 ソ うとい、親しくないの意。
- 礼法 レイホウ 礼儀作法。
- 膏粱 コウリョウ 肥えたうまい肉と、おいしい穀物、おいしい食物。
- 逸居 イツキョ なまけている、気楽に暮らす、安逸をむさぼること。

【解釈】

田舎の人は、礼儀作法を知らないとか、うといということ、馬鹿にしたり、非難することはあたらぬ。夏は、朝から晩まで、一日中、激しく苦しい農作業をしなければならぬ。それに比べて良家の子弟は、いったいどういう見であろうか。毎日うまい食物をたらふく食べて、別にこれといつて役に立つ仕事をしようともせず、毎日怠けて暮らしている。

【考察】

土にまみれて働く人々の勤労の尊さをうたった詩である。それにひきかえ、金持ちや武士たち特権階級の子弟たちが、民衆の上にあぐらをかいて、何もせず贅沢三昧にふけっていることに対して鋭い批判をしている。

貧しく無作法ともいえる田舎の人々に汗を流して誠実に働く姿に素朴な美しさを感じ、無為徒食で贅沢をしている良家の子弟に対して怒りをぶつつけておられる。

示友生

芝蘭室裡有<sub>レ</sub>人無

芝蘭<sub>しらん</sub>室裡<sub>しつり</sub>人有<sub>ひと</sub>りや無<sub>な</sub>しや

應向<sub>二</sub>鮑魚市<sub>一</sub>上<sub>二</sub>趨

應<sub>まさ</sub>に鮑魚<sub>ほうぎょ</sub>を市上<sub>しじょう</sub>に向<sub>むか</sub>はしめて趨<sub>はじ</sub>らしむべし

不<sub>レ</sub>使<sub>二</sub>馨香<sub>一</sub>知<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>愛

馨香<sub>けいこう</sub>をして愛<sub>あい</sub>すべきを知ら<sub>し</sub>めず

休<sub>レ</sub>晒<sub>二</sub>遂<sub>レ</sub>臭<sub>一</sub>海濱<sub>二</sub>夫

晒<sub>わら</sub>ふことを休<sub>やす</sub>めよ臭<sub>しゅう</sub>を逐<sub>お</sub>う海濱<sub>かいひん</sub>の夫<sub>ふ</sub>を

○芝蘭 シラン

芝草と蘭草、共に芳香のある草。

○応 オウ、ヨウ

したがう。しるし、あたる。こたえる。

○鮑魚 ホウギョ

塩づけにした臭い魚。(ふなずしにする塩漬けのふな)

○馨香 ケイコウ

におい、よいかおり、かおりが遠くに及ぶの意。

【解釈】

芝草と蘭草のよい香りのただよう部屋の中は、ひっそりとして人がいるのか、いないのか解らない位である。

塩づけをしたくさい臭いの魚を町へ持って行って生活している人には、よい香りのする芝草や蘭草の香りを楽しんでいる暇などはない。

濱の漁師達のくさいにおいのおいのしみついたこうした暮らしを、だれも笑ったりさげすんだりすることはできない。

【考察】

庶民の生活からかけ離れたところで優雅な生活をしている人と、塩づけをしたくさい臭いのする魚を売り歩く人々の生活と対比させながら、働く人々の勤労の尊さをうたった詩である。前出の農家の暮らしをうたった詩と共通のテーマを持っている。

楠亭先生の住んでおられる筑摩、朝妻の部落は、こうした半農、半漁を業とする人々が多く、五月ごろから初夏にかけて「ふなずしにつけるための、くさいにおいのする魚」を売り歩いたのである。また、先生の家が造り酒屋であるため、一日の労働を終えた人たちが、帰りに立ち寄って、店先で一パイひっかけて、陽気な世間話に華を咲かせるといった場面が想像できるのではないだろうか。

夏至作

南畝東臯揔插秧

南畝東臯 総て挿秧

帰来共語一時忙

帰り来て共に語る一時の忙

濁醪今日忘勞苦

濁醪 今日 勞苦を忘る

豫祝年豐任彼意

年豐を予祝して彼が意に任さん

○挿秧 ソウオウ 稲の苗をうえること。田植え。

○東臯 トウコウ 東の水田。

○南畝 ナンボウ 南のうね、小さい田。

○濁醪 ダクロウ にごりざけ。多く下賤の人の引用する酒。

【解釈】

南の小さい田も東の田圃も、総て田植えが終わった。長い一日の労働が終わって家に帰り、今日の忙しかった農作業を語り合いながら、濁酒の酔いながら一日の勞苦を忘れる。「田はね」「土くだき」「しろかき」と、激しい集中的な労働のあと、田植えによって一段落した。秋の豊年を今から祈り、あとは天の御意志に任そう。

【考察】

田植えが終わわり、ほっとしている農家のひと時である。あちこちに点在する農家の灯が植

え終わった田の面に映え、蛙の音が、にぎやかに聞こえてくる。

このころ農家では、農作業の一段落を祝って、「野休み」「野止め」といって、一村あげて慰勞の休みをとり、餅などを作って、氏神様に備える風習がある。

粗末な濁酒に疲れをいやし、秋の豊年を祈る。素朴な農民の願いがこめられていて、初夏のすがすがしい風物詩である。

偶作

三餘隱々樂々田園

三餘 隱々 田園に樂しみ

世事紛々敢不<sub>レ</sub>論

世事 紛々 敢て論せず

耳尚慙<sub>レ</sub>聽名利言

耳は尚 名利の言を聴くを慙じ

身常懼<sub>レ</sub>入鬪争門

身は常に鬪争の門に入るを憚る

喧叢本是非無<sub>レ</sub>種

喧叢 本は是非なきに非ず

怨艸從來摠有<sub>レ</sub>根

怨草 從來 総て根あり

寧為<sub>二</sub>耕<sub>一</sub>轉<sub>二</sub>勞<sub>一</sub>四體

寧ろ耕耘を為して四体を勞すとも

猶勝<sub>二</sub>諂<sub>一</sub>笑<sub>二</sub>苦<sub>一</sub>心魂

猶諂笑して心魂を苦しむるに優るがごとし

○三餘 サンヨ 三つの余暇。冬、年の余、夜は日の余、陰雨は畦の余。

【解釈】

三つの余暇は、隠気であるが、明るい日ざしをいっぱい受けて田園に出て働くのは楽しい。世の中のことが、あれこれと耳に伝わってくるが、今、それに便乗して、あれこれと論じようとは思わない。

耳は、名誉ある地位に登ることや、金もうけの利益のことを聞くのを恥ずかしく思うし、身体は、いつも殺ばつな争いの渦の中に入っていくのを恐れる。いろいろな喧嘩や争いには必ずそのもとなる種があるものである。また、人の怨みごとのなかにも、すべてその根があるものである。

こうした世の中の俗事にかかわって表面をつくろい、笑いながらも、その奥で心を痛めたり、苦しめたりしている暮らしよりも、むしろ、田畑に出て四体を疲労させて農作業に従事するほうがましである。

【考察】

労働を尊び、自然を友として生活するという楠亭先生の生活信条と、人生観を最もよく現した詩である。徳川三百年の鎖国の夢が、ようやく破れようとして、日本近辺をうかがう外国船の数は増し、国内では尊皇攘夷論が高まり、血なまぐさい争いがくりかえされている。

そして殺ばつな争いの中に若い生命を無惨に散らしていった人も多い。こうした紛々たる世情をよそに静かな生活を楽しみ、寸暇を惜しんで人間の道の実践に励んでこられた楠亭先生の生き方は、同時代に、同じ坂田郡の伊吹山、松尾寺で修業を受け、後の幕末の農政改革の面で、目覚ましい活躍をされ、劇的な非業の死を遂げられた大原幽学先生の生き方とは全く対蹠的な生き方というべきである。

武士と農民、そこには、根源的な違いがみられるが、「人間の幸福とは、いったい何だろうか」といった観点から考える時、さまざまな論議をよぶ題材となるだろう。中学生あたりで討議させたら、面白い結果がでてくるのではないだろうか。

商 鞅

去<sub>レ</sub>衛 来<sub>レ</sub>梁 遂<sub>レ</sub>入<sub>レ</sub>秦  
三 言 四 説 総 非<sub>レ</sub>真  
視 聽 何 頼<sub>二</sub> 総 明 子<sub>一</sub>  
進 退 元 因<sub>レ</sub>嬖<sub>二</sub> 寵 臣<sub>一</sub>  
不<sub>レ</sub>解<sub>二</sub> 富 強<sub>一</sub> 生<sub>二</sub> 怨 慝<sub>一</sub>  
方 教<sub>二</sub> 法 令<sub>一</sub> 及<sub>二</sub> 苛 辛<sub>一</sub>

衛を去り梁に來り遂に秦に入る  
三言四説総て真に非ず  
視聽何ぞ総明の子に頼らんや  
進退元も寵臣に嬖するに因り  
富強を解せずば怨慝を生ず  
方に法令を教して苛辛に及ばしむ

少恩窮處招<sup>二</sup>車裂<sup>一</sup>  
少恩窮する処<sup>ところ</sup> 車裂を招く<sup>まね</sup>  
嗟爾天資酷薄人<sup>ああなんじてんしこくはくひと</sup>  
嗟爾が天資酷薄の人

○商鞅 ショウオウ 戦国衛の人で秦の孝公の左庶長となり、法令を改革し、立身出世をして商の十五邑に封ぜられた。罪人の身体を二台の牛車に分けてしぼり、左右に引き裂く刑罰を考案した。極めて刑法を厳格にしたため日々刑に処せられる者が多く、そのため、謂水の水が赤く染まったという。後恵王のために自らが考案した車裂の刑に処せられた。

○嬖 ヘイ 気に入るの意。

#### 【解釈】

衛の国を去り梁の国に来て、あと秦の国へ入った。いろいろなうわさがあったけれども総て真実ではなかった。

見たり聞いたりすることに、どうして聡明な者ばかりの意見に頼ろうとしたのであろう。すること為すこと、気に入りの家来ばかりを重用して、人民の財政状態を少しも考えないで新しい賦税を強行すれば、人々のうらみを受ける結果になる。

このように法令を徹底して厳しく行い、そのかわりに恵みが少なく、民の不平が高まっ

てくると、自ら車裂を招くことになる。あゝ、お前はなんと薄情な星の下に生まれた人であつたことよ。

#### 【考察】

天保十四年、老中水野忠邦が、余りにも厳しい改革を断行したため、人々の恨みをかい、閏九月にとうとうやめさせられた。天保十四年というと、先生四十三才の時である。まだ家業の酒屋を経営する傍ら、学問の道に励んでおられたのである。

この詩がどのような事情によって作られたものであるのか、具体的には知るすべもないが、改革と同時に酒屋の方も重い税金が徴収され、その影響を、諸に受け、自然に、このような詩が生まれたのであろう。花鳥風月を友としてこられた先生にしては珍しく現実的な作品と言える。商鞅を例にとつてはいるが、この時代の政情の不安がそのまま反映している。天保七年大塩平八郎の乱と、同十二年から同十四年にかけて水野忠邦の、いわゆる「天保の改革」の断行による反動として、民衆の非難が高まり、遂に失脚に追い込まれた世相などと考え合わせると、この詩の作られた意味がよく解る。

商鞅という中国の故事と現際の政情と結びつけて表現している点、やはり非凡というべきである。

竹亭観螢

深竹千竿暗しんちくせんかんくら

飛螢萬点佳ひけいまんてんよし

閣燈臨浄机かくとうじやうきのみぞ

(欠字のため読めず)

擲葉光明滅ちやくよくうみやうめつ

露枝影鱖拜るよしかげいはい

却憎蚊輿虻かえぞうぶんいぶむし

○鱖排 テイハイ ふれ、おしのける。おしりぞける。

【解釈】

シミの害のため、ところどころ欠字となっているために、不明の箇所があつて意味がとり難いが、次のように解釈できるのではないかと思う。

深々と生い茂った藪をバックにして無数の螢が飛び交い壯観である。行燈をよせて、机に向かつているが、思わず書物から目を離してそれに見とれてしまう。

青白い光が、露を帯びた雨上がりの葉の上で明滅している。恐らく、この頃は農事に忙

しく隣近所の人も寝しずまわっていることであろう。風が木々の枝の影をおしのけるようにゆれている。せつかくの、この静かで幻想的な眺めも、襲ってくる藪蚊や虻(あぶ)のために妨げられてしまうのは残念である。

【考察】

深い竹藪の闇をバックに、音もなく飛び交う無数の螢、正に壯観というべきであろう。近くの竹の葉先には、緑の露を含んだ青白い光の明滅、それらが、寝静まった深夜の情景であるだけに、より幻想的である。ぼんやりと眺めていれば見逃しやすい、美しいその瞬間をとらえた作者の繊細な感受性も非凡である。三字欠字になっているが、全体的な詩の意味は汲み取ることができる。

勞事

独面清風立水辺

或歌或叫去来船あるいはうたあるいはあゐいさげきよらいのふね

去時勞者来時逸さるときらうするものくるときいつ

逸々勞々在眼前いついつらうらうらんぜん

【解釈】

ひととせいに面し水辺に立つ

或は歌い或は叫ぶ去来の船

去るときらうするものくるときいつ

逸々らうらうらんぜん



ただ一人、湖岸の水辺に立っていると、涼しい風が湖の方から吹いてくる。近くに船着き場があつて、ある船は歌を歌っているかと思うと、ある船は、船同志、または船の人と岸にいる人と呼び合つて連絡している。

出船の時に忙しく働いていた船は、今度入ってくる時は暇である。労働と暇とが入り混じつてやってくるのが人の世であるが、船着き場の人々が働いているのを見てみると、それを眼前に見るような心持ちがする。

【考察】

筑摩の部落に接して朝妻という部落がある。ここは、千年あまり昔から、湖東一の港として栄えた朝妻港があつた。北国街道、中山道から京、大坂に向かう旅人が、ここから船で大津に向かい、都から江戸へ行く旅人が、ここに上陸して、さらに東に北にとつたのである。

そのため、ここは宿屋が軒を列ね、遊女屋もあつて、かなり賑わつていたということである。江戸時代に入つて、東海道の発展に比べて衰退したとはいへ、楠亭先生のころは、まだ、出船、入り船で賑わつていたことが、この詩からも解る。いまは、この港のあとは、一隻の船の影もなく、石畳のなごりと「朝妻港址」の文字を彫り込んだ、大人の背丈ほどの石柱が、往時の繁栄のあとを示すかのように、湖岸にポツンと立っているだけである。

訪月沢上人客舎 つぎわしやうじんきやくしや

先徳坊頭留玉鞍

せんとくぼうず ぎよくあん とど

江東遊子興漫々

かうとう ゆうし きやうまんまん

春宵一刻催新句

しゆんしやう いっこく しんくを催す

風月三時結旧歎

ふうげつさんじ じゆくを結ぶ

蓮社高談心最浄

れんしゃ こうだん こころもつと きよ

蘭陵美酒齒還寒

らんりやう めいしゆ ばはま さいふ

醉余更煎閑窓燭

すいよ さら さいらん かんそうの たく

相共會無説夜蘭

あいとも かい かなん せつと せつらん

○夜蘭 ヤラン 夜ふけ。

○蓮社 レンシヤ

東晋の恵遠、虜山の東林寺に住し、賢士、遺、宗炳、僧充宗を招き、社を結び、西方の浄業を修めたことをいう。

○蘭陵 ランリョウ

江蘇省武進県にあり美酒を産す。李白詩の「蘭陵」の「美酒鬱金香玉椀盛来琥珀光」による。

【解釈】

徳の高い、すぐれたお坊さんである月沢上人が、旅行の途中立ち寄られ、湖東の風流を

愛する人を集めて新句の会を催された。

清風と明るい月夜に会が終わわり、懇親の会を開いて旧いよしみを結んだ。月沢上人の気高いお話を聞いている間に、自分の心の中までも洗い清められていくような心持ちがする。李白の詩にうたわれた蘭陵の美酒にも比べられそうな、おいしい酒は、齒につめたくしみとおるようである。

酔いがまわるにつれて、静かな窓のそばに置いた行燈の芯を何度も切った。お互いに夜のふけるのも忘れて、話に夢中になり時の過ぎるのも早い。

### 【考察】

月沢上人とは、どんな人であるのか、詳しい記録がないので解らないが、学問上の交流のあった、江戸時代浅草本願寺御坊の住職ではないだろうか。場所も長浜御坊と呼ばれる有名な寺か、近くの福田寺の何れかと推定されるが、今のところ確証はない。

「蓮社の高談心最も淨し」の句にあるように、月沢上人との話し合いに「心の中までもすつきりと洗い流されていくような気持ちになった」と述べておられる。夜のふけるのも忘れ、最も充実した刻を過ごされたことがうかがえる。楠亭先生の人柄を示す密度の高い詩といえよう。

### 自述

学業難<sub>レ</sub>成腹自虚  
鬢毛已<sub>レ</sub>與夙心疎  
終年数々知<sub>二</sub>何益<sub>一</sub>  
任<sub>レ</sub>載無<sub>レ</sub>由闕<sub>レ</sub>轄車

がくぎょうなりがたはらみずかうつろ  
びんもうすでよつとこころおろそか  
しゅうねんかずかずなんえきし  
のまかすに由なしかつを闕けるの車

○轄 カツ 車が心棒から離れないようにさすくさび。

### 【解釈】

学問の道は遠く、なかなかその目的に到達することはできない。ふり返ってみて、これといったものが自分の中に何もない。

頭の髪はうすくはげ上がって満たされない心のさびしさを現しているようである。年だけは多くとつてきたけれど、これではいっただれだけの益があつたことであろう。

それはちやうど、くさびが抜けていて、いつ、なん時、車の輪が心棒から離れて転覆するかもしれない不安定な車に乗っているようなものである。

### 【考察】

楠亭先生のような深い修養を積まれた人でさえ、自己に厳しい。この謙虚な気持ちにまづ心を打たれ、自分の身につまされる詩である。私も五十の坂を越して、自分というもの

をふり返るとき、この詩が人ごとでないような、うそ寒さを覚えるのである。

この詩は、我々に、自分をへりくだって、静かに自分自身を見つめ、謙虚に学問の道に励むことの大切さを教えておられるようである。

特に人を教える立場にある教師は、この謙虚さを忘れずに、絶えず自分を高めるよう努力を続けたいものである。

寄 楓園龍丘二尊者

頭々 顆々 豈無<sub>レ</sub> 因

頭々<sup>とうとう</sup> 顆々<sup>かか</sup> 豈<sup>あに</sup> 無<sup>いな</sup> からん

去喜来 憂如<sub>二</sub> 轉輪<sub>一</sub>

去喜<sup>きよ</sup> 来<sup>らい</sup> 憂<sup>ゆう</sup> 轉輪<sup>てんりん</sup> の如<sup>ごと</sup> し

一刻千金 花月 諸

一刻<sup>いっく</sup> 千金<sup>せんぎん</sup> 花月<sup>かげつ</sup> の諸<sup>しよ</sup>

不堪 風雨 作<sub>レ</sub> 魔臻

堪<sup>た</sup> えず 風雨<sup>ふうう</sup> の魔<sup>ま</sup> を作<sup>つく</sup> っ て 臻<sup>しん</sup> す

○顆々 カカ 小さい頭。

○臻 シン・セン いたる。およぶ。およぼす。あつまる。

【解釈】

大きい集団の頭と小さい集団の頭になると、そこには、必ず何らかの原因があるにちがいない。

喜びが去って、心配事がやってくるのは、ちよほどまわっている車の輪のように、つきることがない。

一刻千金の花や月の風情があるかと思うと、一方ではその雨や風を集めて魔を作り、それらを散らしてしまうことがある。

【考察】

楓園、竜丘二尊者に寄す、の題名にある二人の人物については不明である。よく絵などに讃をして詩に書いておられるので、その類の詩ではないかと思う。

大きい集団の長といえ、当時では、藩主、殿様、現在でいうなら、さしずめ大会社の社長で、小さい集団の長となると、それらの下請けの中小企業の社長といったところであろう。そうした集団の長と呼ばれるものには、人並みはずれた努力や才能が必要であり、ただ漫然とされるものではない。必ずそこには、一つ一つの原因となるものがあるのである。ちよほど、「まかぬ種は生えぬ」の諺の通りである。

このように考えてくると、楓園、竜丘の二尊者は、天秤棒一本で成功した、近江八幡か五個荘あたりの豪商ではないか、とも考えられる。

人生楽あれば苦あり、で悲喜交々、ちよほどまわっている車輪のようにつきることがない。現在の苦しみを、もう少し辛抱すれば、幸福や楽しみが巡ってくるというのに、そこ

まで耐えることができずに、一家心中や死に急ぎをする人が後をたたない。

この詩も、天命のままに、あくせくとせず、たとえ、不幸のどん底に落ちこんでも、くじけず、幸せの端著をつかむよう努力し、こんど巡ってくるチャンス statically を静かに待つという、楠亭先生の人生訓に相通じるものがある。恐らく、楓園、竜丘尊者も、そうしたたたかな根性で事業を成功に導いた人ではなかっただろうか。

呈同學諸君

綿々 不<sub>レ</sub>絶 世 間 塵

めんめん 絶えず世間の塵

作<sub>レ</sub>網 為<sub>レ</sub>羅 糾<sub>二</sub>此 身<sub>一</sub>

網を作つて羅となしこの身を糾す

時 習<sub>二</sub>於 吾<sub>一</sub>無<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>得

時に吾習つて得る所なし

又 同 蕉 鹿 夢 中 人

また同じく蕉鹿の夢の中の人

○綿々 メンメン

長く続いて絶えないの意。

○羅

ラ つつみくるめる。

○糾

キユウ あわせる。

○蕉鹿の夢 ショウロクのユメ

人間の得失のはかないことのとえ、昔、鄭の人が鹿を殺して芭蕉の葉でおおっておいて、後でそれを

取りにこようとしたが、その場所を忘れ、他人に取り去られてしまった。これを一つの夢なりとして、あきらめたという故事による。

【解釈】

浮世の塵から離れようと願つても、それから逃れることはできない。孔子の弟子願回が、貧乏のために着る物もなくして網を作つて、この身をつつんだという程の貧しさの極に立ちながらも、なお、学問の道を忘れず、遂にその道を極めたという故事にならつて、自分の学問の道に打ち込もうとするけれども、いたずらに時を費やしているだけで何ら得るところがない。また、人間の得失のはかないことは、蕉鹿の夢の故事と同じようなもので、そのうちに、何とかしようと思ひながらも、夢に終わつてしまつて実現しないことが多い。

【考察】

人それぞれ、この詩のような感慨を持たない人はないのではなからうか。

やろうと一度は決心しても、日常のいろいろな雑務に追いまくられて、一つの仕事なり学問の道に打ちこんでやるといふことは、なかなか難しいものである。

楠亭先生も家業である酒屋を経営し、また農作業に精を出しながら、その上、寸暇をおしんで書物を読み、道の実践に努めてこられたのである。この詩の内容から推察すると、

家業を弟にゆずられる前で、先生の四十五才以前の作ではないかと思われる。

夏日野村君来遊喜賦

夏日野村君の来遊を喜びて賦す

道學先生同窓翁

道學先生同窓の翁

一窓相對坐清風

一窓相對して清風に坐す

大湖涼味君兼知

大湖の涼味君兼ねて知る

奥在<sub>二</sub>怡々快々中<sub>一</sub>

奥は怡々快々の中に在り

○道学先生 ドウガクセンセイ

ひろく儒教の先生をさしている。

○怡々 イイ

やわらぎよろこぶさま。

○快々 カイカイ

心持ちよいさま。

○奥 オウ

室の西南隅で、室内の最も尊いところ。部屋の中。

#### 【解釈】

儒学の先生で、共に同じ道を志す友人である野村君が尋ねてきてくれた。

涼しい窓辺に向かい合って座る。琵琶湖の湖面から吸い付くる風の心地よさは、君も前々から知っておられる。

粗末な草堂ではあるが、久しぶりの親しい友を迎えて、部屋の中は心地よいやわらぎと

喜びにつつまれている。

#### 【考察】

野村君というのは、野村東皐（トウコウ）、名は公台で字名は賤、通称新左エ門といった。沢村琴所に師事したあと、徂来の学に私淑した。彦根藩の藩儒で修辭をよくし、江州において、はじめて古注疏を主唱し、江州の学風を一変させたといわれる人である。そうした儒学の大家が、草深い筑摩まで態々やってきたのである。しかも、ごく親しい友として久しぶりに会った喜びが、詩の中にあふれている。

「一窓相對座清風」「大湖涼味君兼知」の表現が、格調のある響きを読む人に伝える。対句になっているが、実際に、住居のあった跡に立ってみると、この句が眼前に浮かび上がってくる。

久しぶりに親しい友を迎えて、時の移るのも忘れ、なごやかな談笑の中に時が流れていく。

先生が四十五才で隠居されてからの作と考えられる。楠亭先生の人を迎える時の懇親の情の厚かったことは、小野湖山の詩にもみえていて、単なる詩の上の修辭ばかりとはいえないであろう。

一部屋と、勝手元の炊事場があるだけの粗末な小さい家であり、その周りを柴垣で囲っ

であるだけの閑静な住居である。それを見下して、いだくかのように楠の巨樹がそびえ立ち、村はずれからも、それが遠く眺められたということが記されている。小さい粗末な住居ではあったが、いろいろな階層の人々が訪れ、内容的には充実したものであったことがうかがえる。

楠亭先生の詩集の中でも印象深い詩である。彦根藩の儒管である野村東臯が、わざわざ訪ねてきたのである。これは、単なる風流の話し合いだけではなく、彦根藩の藩儒として召しかかえるための使命を帯びて仕官をすすめにきたとも考えられる。このことは、次の詩を読むと更にはつきりとしてくるのではないだろうか。

偶作

一窓臨水一窓山

一窓は水に臨み一窓は山に

山水生涯事業閑

山水の生涯事業閑なり

眼看風雲多変態

眼風雲の変態多きを見る

我今無意出柴門

我今柴門を出づるの意無し

【解釈】

一つの窓は湖水に臨み、一つの窓は山（伊吹山か…）に面している。

山と水の大自然を相手として暮らしている現在の生活には、世間の騒然とした状態とは関係なく暇である。眼はわき上がってくる雲の千変万化を見ていてあくことを知らない。自分は今さら、この気楽な境がいすてて、他に生活の道を求めようなどという気持ちは、更々ない。この生活に満足である。

【考察】

彦根藩儒官として、仕官をすすめられても、これを辞退して、自分の現在の生活をかたくなに守っていかうとされた楠亭先生の心意気が、よく現れている。

「眼は風雲の変態多きを見る」の句は、単なる眼前の風雲ではなく、もっと政変の激しい動きをも、第三者的な冷静な眼で見つめていかうとする態度をも示している。

とにかくこの詩を読むことによって、楠亭先生の生活信条や、日常生活の一端が、まのあたりに浮かんでくるような詩である。

寄竹子鳳老翁

竹子鳳老翁に寄す

富貴栄名多苦辛

富貴栄名苦辛多し

請君休笑我甘貧

請う君笑うことを休めよ我貧に甘んずる

囊中幸為黄金少

囊中幸に黄金少しとなす

□ 世間 人情 不<sub>レ</sub>親

世間の人情と親しからず

【解釈】

財産があり、位が高いことや、名誉ある地位を得ることは、世間一般の人々の願うところであるが、それに伴う苦労や悩みもまた多いことである。

「君よ、どうか笑うことをやめて下さい。私がこうして貧乏な暮らしの中で、十分満足していることを」

幸いに財布の中のお金は少なくなってきた。世間一般の人々の常識で考えると

「どうしよう、お金が少なくなってきた。」と、大騒ぎするところであるが、私はこれで満足で、格別不自由も感じない。

私のこうした考えは、世俗な人々の考え方とまるで正反対であり、何とか離れていることであろう。

【考察】

竹子鳳老翁にあてて書いた詩であるが、竹子鳳という人が、先生とどういうつながりのある人物であるのか不明である。

多くの交友関係の中で、そうした人もあつたであろうが、楠亭先生の詩集を検討してみると、現実の親交のあつた友人ではなく、故人となつている人の絵などに、詩を思いのま

まに書いておられるので、そうした類いの詩ではないか、とも考えられる。

一見すると、反世俗な孤立した人のようであるが、内に固い信念と高い理想を掲げながらも、各階層の人々と親しく交じり導いていかれた点、やはり優れた人であつたことが解る。

夏 夜 即 時

夜 色 清 涼 雨 後 天

夜色清涼にして雨後の天

松 風 竹 月 一 窓 前

松風竹月一窓の前

不<sub>レ</sub>令<sub>二</sub>画 趣 知<sub>二</sub>蘆 俗<sub>一</sub>

画趣をして蘆俗を知らしめず

独 立 閑 庭 黙 々 然

ひとり閑庭に立って黙々然たり

○画 趣 ガシユ 画題になるような趣。

○蘆 俗 ザゾク ござなどにたまつたちり、ほこり。

【解釈】

夕立の後の空は、すがすがしい夜の色につつまれている。松のこずえを吹いてくる風と、竹の葉に光る月の影が青白く照らしている。窓際に立ってそれを眺めていると、世俗のちに染まらない風雅な絵のような趣がある。

ただ一人静かな庭に立ちつくして、その美しい風景を黙々としてながめている。

【考察】

心の豊かさは、周囲のどんな小さな事の中にも美を見出し、感動する心である。気持ちのよい夕立の後の一刻、美しい夜空に銀の砂子を散りばめたような天の川がかかっている。

やがて顔をのぞかせた月の光に、露をふくんだ竹の葉が照り輝いている。そのさわやかな雅趣に富んだ情景、そこには日本の美の伝統である「わび」「さび」の境地に通じるものが見出されるのではないだろうか。

贈杏村山人

一筆多年不<sub>レ</sub>染<sub>レ</sub>塵

一筆<sub>いっぴつ</sub>多年<sub>たねん</sub>塵<sub>ちり</sub>に染<sub>そ</sub>まず

知君意匠日相<sub>レ</sub>新

知る君<sub>きみ</sub>が意匠<sub>いしやう</sub>日<sub>ひ</sub>に新<sub>しん</sub>を相<sub>そう</sub>す

経営已極<sub>二</sub>師門秘<sub>一</sub>

経営<sub>けいえい</sub>已<sub>すで</sub>に師門<sub>しもん</sub>の秘<sub>ひ</sub>を極<sub>きま</sub>める

初見南宗面目新

初<sub>はじ</sub>めて見る南宗<sub>なんそう</sub>の面目<sub>めんぼく</sub>新<sub>あらた</sub>なるを

○意匠　イショウ　工夫をこらすこと。

○南宗画　画家の一派、唐の王維を宗として、墨絵の山水を首位とする

もの。

【解釈】

世俗の塵にまじわされず、画業一途に多年打ち込んだ。そして、君の画に対する趣向や工夫が日に日に新たなるものを創り出してきているのが解る。

この工夫をこらした画業に対する営みは、既に師匠の家の秘伝をも極めている。君の絵をみることによって、南画の持つすばらしさについて、いま新たに開眼させられたような心地がする。

【考察】

杏村山人という人は、河野杏村ではないかと思われる。淡路の人、名は逸。通称一平、大阪に塾を開いて教授をした。詩文に巧みで、明治十年一月十四日に没している。年齢六十一才、楠亭先生とは十七才ほど年下である。当時、三十六才位の少壮の画家ということになる。恐らく詩を通じて交わりがあったのかもしれないが、果たして河野杏村であるのか断定はできない。

次の「南谷盟兄に寄せて杏村山人の絵を求む」の詩を読んでもみると、杏村山人の絵がよほど気に入っておられたことが解る。



寄南谷盟兄儒杏村山人之画

南谷盟兄に寄せて杏村山人の絵を儒む

我 愛<sub>二</sub>此 人<sub>一</sub> 求<sub>二</sub>此 画<sub>一</sub>  
彼 求<sub>二</sub>此 画<sub>一</sub> 愛<sub>二</sub>斯 人<sub>一</sub>  
求<sub>二</sub>情 愛<sub>一</sub> 思<sub>レ</sub>君 知 耳  
不<sub>レ</sub>問 丹 青 新 不 新

我<sub>おれ</sub> 此<sub>こ</sub>の 人<sub>ひと</sub>を 愛<sub>あい</sub>して 此<sub>こ</sub>の 画<sub>え</sub>を 求<sub>もと</sub>む  
彼<sub>かれ</sub> 此<sub>こ</sub>の 画<sub>え</sub>を 求<sub>もと</sub>めて 斯<sub>か</sub>の 人<sub>ひと</sub>を 愛<sub>あい</sub>す  
情<sub>じやうあい</sub> 愛<sub>あい</sub>を 求<sub>もと</sub>む 君<sub>きみ</sub>を 思<sub>おも</sub>つて 知<sub>し</sub>る 耳<sub>みみ</sub>  
問<sub>と</sub>わ ず 丹<sub>たん</sub> 青<sub>せい</sub>の 新<sub>しん</sub> 不<sub>ふ</sub> 新<sub>しん</sub>を

【解釈】

私は、杏村という画家の人柄にひかれてこの柄を購入し、身近にながめて楽しんでる。彼（南谷）は、この画を購入し、ながめ親しんでいるうちに、この画の作者である杏村の人柄にひかれ、この人を好きになつてしまった。人間の心のなさけ、いつくしみの心の美しさを、君（杏村）によつて知らされたような気持ちがある。

この画に対する技法の新しいとか、古いとかは、この際、問題外である。

【考察】

南谷という人も、楠亭先生とどんな関係にあつた人か不明であるが、この詩から推察すると、日頃から親しくしている友人の南谷が新しく購入した杏村の画を初めて楠亭先生に披露したので、この絵に讃をされたものではないだろうか。

楠亭先生も杏村の絵を所有し、互いに杏村という画家の人柄にひかれ、共通の話題も多かったことであろう。

仲 秋 作（二首）

閑 亭 座 覺<sub>二</sub>暑 威 空<sub>一</sub>  
修 竹 千 竿 摩<sub>二</sub>碧 穹<sub>一</sub>  
密 葉 低 垂 弧 牖 外  
繁 梢 覆 陰 一 庭 中  
清 陰 盡 日 能 留<sub>レ</sub>露  
幽 處 無<sub>レ</sub>時 不<sub>レ</sub>起<sub>レ</sub>風  
偏 □ 此 君 涼 意 足  
襟 懷 豈 羨<sub>二</sub>楚 台 雄<sub>一</sub>  
○ 碧 穹 へ キクウ 青くすみきつた空。  
○ 修 竹 シユウチク 長く伸びた竹。  
○ 弧 牖 コユウ 一つある、れんじ窓。  
○ 襟 懷 キンカイ 心の中、胸の中。

閑<sub>かん</sub> 亭<sub>てい</sub>に 座<sub>ざ</sub>して 暑<sub>しよ</sub> 威<sub>い</sub>の 空<sub>ひま</sub>しさを 覺<sub>おぼ</sub>ゆ  
修<sub>しゆ</sub> 竹<sub>ちく</sub> 千<sub>せん</sub> 竿<sub>かん</sub> 摩<sub>ま</sub>す 碧<sub>へき</sub> 穹<sub>きゆう</sub>  
密<sub>みつ</sub> 葉<sub>よう</sub> 低<sub>ひく</sub>く 垂<sub>た</sub>れる 弧<sub>こ</sub> 牖<sub>ゆう</sub> の 外<sub>そと</sub>  
繁<sub>はん</sub> 梢<sub>しやう</sub> 覆<sub>おほ</sub>い 陰<sub>かげ</sub> す 一<sub>いつ</sub> 庭<sub>てい</sub> の 中<sub>なか</sub>  
清<sub>せい</sub> 陰<sub>いん</sub> 尽<sub>じん</sub> 日<sub>じつ</sub> 能<sub>よ</sub>く 留<sub>とど</sub>め 露<sub>つゆ</sub>  
幽<sub>ゆう</sub> 處<sub>しよ</sub> 無<sub>な</sub>く 時<sub>とき</sub> 風<sub>かぜ</sub> を 起<sub>お</sub>こさ ず  
偏<sub>ひん</sub> に 此<sub>こ</sub>れ 君<sub>きみ</sub> 涼<sub>りやう</sub> 意<sub>い</sub> 足<sub>た</sub>る  
襟<sub>きん</sub> 懷<sub>かい</sub> 豈<sub>あに</sub> 羨<sub>そたい</sub> 楚<sub>ち</sub> 台<sub>たい</sub> の 雄<sub>ゆう</sub> を 羨<sub>うらや</sub>まんや

○楚台 ソタイ 楚台、共に中国の地名。

【解釈】

静かな小部屋に座っていると、あれほど厳しかった暑さも、うそのようである。長く伸びた竹が、青くすみきった空を、さらに磨き、清めているかのようにゆれている。密生した葉は低く垂れて、一つのれんじ窓の外にある。

おい繁った庭木やまわりの木々の梢は、庭の中を陰で覆いかくしている。このすがすがしい陰は一日中露を含んでおり、その奥深いところは、まるで時間が停止したかのように、風も立たず静まりかえっている。

(欠字の箇所があり不明)

この静かなたたずまいの中に身をおくとき、どうして楚や台の国を、はなばなしく制覇した英雄たちの活躍を羨む必要があるのか、この静かな生活の中にもすて難い良さがある。

【考察】

楠亭先生の住居の閑静なたたずまいがしのばれる詩である。湖岸沿いに竹林が多くあったことは、中川漁村の「楠亭記」にも書かれているが、当時の筑摩はどこどころ竹林が多くみられる、さびしい村落であったことが想像できる。

「長く伸びた竹が、青くすみきった初秋の空を、更に磨き、清めているかのようにゆれ

ている。」という表現は、繊細な詩的感覚をよくあらわしている。最後の連の「襟懷豈楚台の雄を羨まんや」は、楠亭先生の心意気を示すものとしておもしろい。

自然の美しさを、自分の生活の中に、豊かに取り入れて充実した日々を送ることは、現代の物質文化万能の生活からみれば到底理解しがたいところであるが、物の豊かさと比例して青少年の非行化と精神的荒廃からくる多くの社会問題を考える時、楠亭先生の生き方の中に、今日の我々が学ぶべき多くのものがあるのではなからうか。

岡廣松三太夫見枉駕

岡広松三太夫駕を枉げらるるを見て

非是秋江追興来

秋江を非是して興に追うて来る

衣冠何事坐荒苔

衣冠何事ぞ荒苔に坐すとは

渴生飽酔高人酒

渴生じて高人の酒飽酔するは

勝彼金□露一杯

(欠字のため 判読が困難である)

○飽酔 ホウスイ 酔いしれていること。

○非是 ヒゼ 道理にかなっていない。正しくない。

○荒苔 コウダイ 腐敗した役所。

○衣冠 イカン 官吏の称、衣冠をつけた人。

○高人 コウジン 心を高尚にして仕えない人。

【解釈】

秋江という人を、国法にそむくけしからぬ者として、その行方を追ってきた。しかし、それを追う役人は、いったいどうであろうか。腐敗し、道義が地に落ちてしまった荒廃した役所にあつて、その座にすわり、汚職役人や悪徳商人の供応する酒に酔いつれておられるとは、……

【考察】

短い詩であるが、意味の取りがたい箇所があつて悩まされた。そして秋江をどう解釈するかが一つの鍵である。秋江を秋の河や湖と読んで字の如く直訳すると、何のことも解らないし、前後の文意のつながりもなく支離滅裂となつてしまふ。

異学の禁をおかしたという理由で、幕府の厳しい追及を受けて逃亡生活を続けなければならぬ人……。然し、それを追う役人は、いったいどうであろう。

現代のロッキード事件やグラマンの売り込みの疑獄事件のように、役人や政治家の腐敗墮落は江戸時代末期にもずいぶんひどかつたようである。

客中奉寄青山尊者

客中青山尊者に寄せ奉る

離<sub>レ</sub>群常嘆息

群れを離れ常に嘆息す

天地少<sub>二</sub>心明<sub>一</sub>

天地心明の少なきを

白眼蘆中客

白眼蘆中の客

青山雲外僧

青山雲外の僧

秋風與<sub>レ</sub>心動

秋風心に動くべし

夜月思<sub>レ</sub>難<sub>レ</sub>勝

夜月思い勝ち難し

何日抛<sub>二</sub>刀劍<sub>一</sub>

何の日か刀劍を抛つて

随師似<sub>二</sub>葛藤<sub>一</sub>

師に似葛藤に似たり

○客中 カクチュウ

旅行中、旅にある間。

○青山尊者 セイザンソンジャ

青山尊者というのは、楠亭先生とどういふ関係の人であるのか不明であるが、江戸の人で、名は字行方、通

称は松沢金三郎、天保五年七月七日、首藤宗昌、井上

四明に師事する。とあるが、この人ではなからうか。

人をにらむ眼つき、人を冷遇する眼つき。

○白眼 ハクガン

青山、白雲の中に高する人。

【解釈】

常に俗人の群れから離れ、この世の中には心からの友だちが少ないことを嘆いている。塵中の客からも冷遇され、自ら清らかな大自然の中で生活し、秋風と共に、ひょうひょうと動き、風流の道への思いを断つことができず、何時の日か、武士の生活をすてて師に従い素直にその教えを守っているのは、あたかも、支えの木にまつわりついている葛藤（ツラフジ）に似ている。

【考察】

昔から風流の道にあこがれて武士をすてて、さすらいの旅に出た人は多い。西行法師、松尾芭蕉などがある。この詩にあげられている青山尊者、すなわち松沢金三郎は、もと幕府賄方に勤めていたが、やがて武士をすてて、首藤宗昌、井上四明に師事し、天保五年に没していることから考えて、楠亭先生とは同時代の人であり、全国放浪の旅に出て、あるいは筑摩に立ち寄ったとも考えられる。

また、近くの近江町顔戸に山月青山という住職がおられ、楠亭先生とは得に親交があつた、兄弟の契りをされたことが記録に残っている。この詩にでてくる青山尊者と同一の人であろうか。

客 中 秋

独倚高楼对晚晴  
城中物色人秋清  
一樽頻勸尊罍與  
寸録空違丘壑情  
梧葉風瓢愁不散  
松林雨渡夢難成  
從來結髮多勞苦  
好以詩狂合退耕

ひとり高樓に倚りて晩晴に對す  
じやうちゆうぶつしよく ひとあきすま  
城中物色する人秋清し  
いちどん しばしばと尊罍を勧め  
すんろく ぐらひなく せうがく たが じじや  
寸録空しく丘壑を違うの情  
ごよう ふうひやう  
梧葉風瓢として愁い散ぜず  
しやうりん あめわた ume na  
松林雨渡りて夢成り難し  
じゆらい けつぱつ ろうく おお  
從來結髮多勞苦し  
よく詩狂を以つて退耕に合せん

○尊罍 ジュンロ ジュンサイ、あつものとなすきのなますの意味である。

○寸録 スンロク 少しの給料、薄給。

○丘壑 キユウガク 岡と谷、転じて、隠者のすまいのこと。

○梧葉 ゴヨウ あおぎりの葉。

○結髮 ケツパツ 儀礼、士冠礼。

○退耕 タイコウ 官途を退いて、農作業に従事する。

【解釈】

独り高樓に登って晴れ渡った夕空に向かつて立っている。城中に人影はなく、秋気は清らかにあたりをつつんでいる。

一樽の酒と料理をしきりにすすめられる。薄給で世俗を離れ、隠者の生活をしている者にとつて、およそふさわしからぬ場所へ出たようなものである。

青ぎりの葉は、風に飄々となつて心の愁がなかなか晴れようとしなない。松林を渡る時雨の音が時々聞こえて眠ることもできなかった。前々から武士のかたぐるしい儀礼的なものは苦勞の多いものと聞いていたが、全くその通りである。

こうしたわざわしい武士の生活とは無関係に、折にふれて詩を作り、田畑に出て農業に従事して汗を流す現在の隠者のような生活が自分にとつて最もふさわしいものである。

【考察】

彦根城の城中へ招かれ泊まった時の作か、友人である野村東犀や中川魚村を城中のやしきに尋ね引き留められて泊まった時の作かの、何れかと推定されるが、詩の内容から考えると、そうした私的なものではなく、公的に招かれた時のようにもとれる。

筑摩の楠亭先生の宅には、彦根藩の藩士たちも、遠近を問わず、大勢その教えを受けるために集まったといわれているので、藩士の中にも弟子が多かったことであろう。

楠亭先生の学徳が高まるにつれて、藩の儒官として再三招へいを受けたが、固く辞して、この筑摩の地を離れようとせず、田夫野人としての隠者の生活を強く望まれたのである。最後の叫びの句に、その決意の程がうかがわれる。

送竹園師帰湖中

竹園師湖中を帰るを送る

兄弟携来入帝州

兄弟携え来つて帝州に入る

何圖君去尚淹留

何ぞ圖らん君去つて尚淹留するとは

浮雲惜別山城晚

浮雲別れを惜しむ山城の晩

明日傷情江国秋

明日情を傷ましむ江国の秋

五斗人間違旧社

五斗人間旧社を違う

三衣象外縦清遊

三衣象外清遊を縦にす

湖中同友如相問

湖中の同友の如し相問わば

為報風塵独自愁

報を為せ風塵独り自ら愁うと

○帝州 テイシユウ 山城の国。

○圖 ト 図（はか）ること。

○淹留 ニンリュウ 久しくとどまること。

- 五斗                   ゴトウ                   五斗米、薄給の義人をさしていう。
- 象外                   シヨウガイ               心が形の外に超えたるをいう。
- 三衣                   サンイ                   僧の三種の法衣。大衣、七条、五条、転じて僧侶の義。
- 旧社                   キユウシャ               同志、盟友など、事を同じくするものが相集まって結ぶくみあい。

【解釈】

兄弟がそろって、山城の国（京都府）へやってきた。どういう考えがあつてか、君は一度去つてなお長い間とどまつている。浮雲が去り難く暮れがたの山城にかかつているようである。そして明るい月が、江国の秋をおしむ風情で顔をのぞかせてきた。

薄給精錬の人が、昔の約束をたがえ、僧侶という身分の外で、勝手気ままに風流の遊びに興じている。そしてまた湖国の同友を尋ねていく積もりらしい。風塵よ、私が独り心配しているこの気持ちをどうか伝えておくれ。

【考察】

詩の題名が、「竹園師湖中を帰るを送る」となっているので、別れを惜しむ心情をうたつたものと考えたが、注意して読んでみると、どうやらそんなに単純なものでもなさそうである。

「五斗人間旧社を違え、三衣象外清遊を縦にす。」の二行の句が、竹園師の行動に対する批判とみることができる。御仏の教えを守るべき僧侶が、その使命を忘れ、清遊に名を借りて知人の家にとり留してぜいたくな暮らしをしているのを、暗に非難していることがうかがえる。

現在の宗教界の争いを考える時、昔も今も人間の行為というものは、大して変わりのないことが解り興味がある。

- 閑窓破<sup>レ</sup>夢<sup>レ</sup>雨<sup>レ</sup>声<sup>レ</sup>高<sup>レ</sup>                   閑窓<sup>かんそう</sup> 夢<sup>ゆめ</sup>を破<sup>やぶ</sup>つて雨<sup>あま</sup>声<sup>こゑ</sup>高<sup>たか</sup>し
- 独<sup>ニ</sup>剪<sup>ニ</sup>残<sup>ニ</sup>燈<sup>ニ</sup>試<sup>ニ</sup>染<sup>ニ</sup>毫<sup>ニ</sup>                   独<sup>ひとり</sup>り残<sup>ざん</sup>燈<sup>とう</sup>を剪<sup>き</sup>つて染<sup>せん</sup>毫<sup>こう</sup>を試<sup>こころ</sup>む
- 幽意更<sup>ニ</sup>疑<sup>ニ</sup>山<sup>ニ</sup>際<sup>ニ</sup>坐<sup>ニ</sup>                   幽<sup>ゆう</sup>意<sup>い</sup>更<sup>さら</sup>に疑<sup>ぎ</sup>山<sup>やま</sup>際<sup>まわ</sup>の坐<sup>ざ</sup>
- 檐溜恰<sup>ニ</sup>似<sup>ニ</sup>瀑<sup>ニ</sup>泉<sup>ニ</sup>號<sup>ニ</sup>                   檐<sup>たんりゆう</sup>溜<sup>あ</sup>恰<sup>か</sup>も瀑<sup>ばく</sup>泉<sup>せん</sup>の號<sup>まけ</sup>ぶに似<sup>に</sup>たり
- 即時                   ソクジ                   風景事物を即座に吟ずること。
- 檐溜                   タンリユウ               軒を伝つて流れる雨水。
- 泉毫                   センゴウ               筆に墨をふくませること。
- 幽意                   ユウイ                   物静かな思い。ふかい思い。

【解釈】

静かで閑寂な夢をまるで破るかのように、雨の音が高く耳を打つ。独り行燈の残りがきれるまで、筆に墨をふくませて詩作を試みようと思う。

もの静かで、深い思ひは、ちようど深山の山際に座っているようで、軒を伝って流れる雨水の音は、高いところから落ちる滝の音に似ている。

【考察】

静かな夜半に、突然やってきた夕立ちだろうか、人々は寝静まって物音一つせず、雨の音だけが高く耳をうっている。詩を作ろうと思って筆に墨をふくませて目を閉じていると、深い山の中に座っているようで、軒を伝って流れる雨水の音は、ちようど高いところから音をたてて流れ落ちる滝の音に似ている。

こうした日常生活の何でもないと思われるものの中から詩の題材を選んで詩に表現しておられる点はやはり非凡である。

寄懐細香女史

懐を細香女史に寄せて

久慕聲香 □ 我 □  
空消歳月 苦風塵

(欠字のために判読が難しい)  
空しく歳月を消して風塵に苦しむ

諸君有意 摸書致

請う君意あらば書致を摸せ

為寄江山失路人

江山失路の人に寄する為に

○書致 ショチ

手紙を書いて人に送ること。

○失路の人 シツロ

出世の途を失った人。

【考察】

欠字があるため全体的な解釈はできないが、部分的な語句から全体的なものを考えていくより今の資料の段階では仕方がない。

いつの頃の作か不明であるが、「空しく歳月を費やして風塵に苦しむ」の句から考えると、四十五才以後の作とも、あるいは五十才を越えてからの作か、とも思われる。

「風塵」「風塵」は同じ意味を持つ言葉で、うきよ、俗世間のと、悪い世間のうわさ等、いろいろの解釈がうまれる。「風塵」を花柳の地、遊女、娼妓のことをさしている場合もあるが、ここではそれは当たらない。

「懐を細香女史に寄せる」という題名から、よほど楠亭先生の心をとらえた意中の人であったのであろう。自然の小さな美をもみのがさず、その中から豊かで繊細な美を発見しておられるので、その美的感覚が女性に向けられたとすると、才色兼備のよほど優れた女性ではなかったかと想像されるが、この除欠字であることが、読む人にいろいろなイメー

ジを作る上に効果があるものである。「風塵」に苦しむ、の句を悪いうわさに苦しめられて  
いると解することもできるが、当時二人の仲が取りざたされ、うわさになっていたと考  
えるのは下司の勘ぐりで、いただけでない。恐らく楠亭先生の人柄から考えて、意中の人があ  
り、手紙の交換もなされたであろうが、内に秘められた愛としてプラトニッククラブに終わ  
ったことであろう。

楠亭先生といえは、堅い道学者を想像し勝ちであるが、そうした立て前論的なものでな  
く、我々と同じ人間的な弱点や悩みや苦しみを持ちながら、それを立派に克服していかれ  
た点はやはり楠亭先生の偉大さがある。

私は、この詩を読みながら、ふと「良寛禅師と貞心尼」のことを思い起こした。話が横  
道にそれるが、貞心尼二十九才、良寛禅師六十九才の時に二人は初めて出会い、歌道を通  
じて子弟の關係が深まり、七十四才で良寛禅師が示寂するまで、陰のように寄り添い、あ  
たたかい心のつながりが消ゆることがなかったと伝えられている。

それはあたかも、枯れ木に色どりをたえる紅蔦のように、良寛の晩年に、こつ然として  
現れ、最初の歌集を編集したり、「はちすの露」などの良寛の臨終の模様などを詳しく書き  
残しているなど、晩年の良寛禅師の生涯に大きな影響を与えている。

恐らく楠亭先生と細香女史の關係もそうした類のものではなかっただろうか。人と人と

の巡り合わせは、時には不思議な組み合わせをするものである。現在のところ、資料もな  
く、具体的な手がかりは全くないが、楠亭先生をめぐる女性として珍しい詩で、創作的な  
小説の題材としては興味のあるものである。

#### 即時

人 謂 那 辺 奇 鳥 鳴  
欲 看 奇 鳥 下 階 行  
不 知 何 處 高 飛 去  
只 此 花 間 鬪 雀 声

人 謂 那 那 邊 奇 鳥 鳴 且  
奇 鳥 看 之 欲 下 階 行 去  
知 不 知 何 處 高 飛 去 之  
只 此 花 間 鬪 雀 聲 也

#### 【解釈】

家人が「どこかで、珍しい鳥が鳴いている」と知らせてくれた。その鳥を見ようとして  
階段を下りていくと、どこか知らないが、高く飛び去るのを眺めただけであった。

そして聞こえてくるのは、ただ近くの花の間でかしましく鳴いている雀の声だけであつ  
た。





更にその左手には、田舎の好々爺を思わせるような感じの伊吹山が、どっしりと雄大な山容を見せてそびえている。

正に絶景というべきである。特に秋のすみきった大気の中で眺めるこの風景はまた格別である。

この詩は、無題となっているし、註釈もないので、どこで詠まれたものかは明らかではないが、地理的に考えても直線で筑摩から約十四キロメートル程の距離にあり、当時の手こぎの船で清遊には、ちょうど格好の場所といえる。恐らく長浜の御坊か福田寺へ来られた客僧をもてなすために、竹生島に一泊して吟行の会が開かれた、その時の作ではないだろうか。

心配していた雨も晴れ上がって、あたり一面に展開する風景は、まるで洗われたように目に鮮やかである。

今日の主客である高僧が、私をよばれたので、高い展望台に登ってみると、高僧は湖山の風景を指さして詩を作ろうとしておられた。そして、私にも詩を作るようにすすめられた。

私も詩を作ろうとして黙々として考え、いっしょうけんめい詩を引き出そうと独り想を練ってきた。

じっと眺めていると、湖水の色や山の形が、次第に変わった趣に見えてくる。一句が頭の中に浮かんだかと思うと、あとからあとから、泉のように、わき上がってきたが、まだ題は見つけ出すことができない。

上人の作られた詩を見ると、あまりにも上手に作られているので、私共の力では、到底足元に及ばず、詩を作ろうとして持っていた細筆を思わず、すててしまいたいような気持ちが出た。

はるか千里の遠くまでも、見通せるかと思うような雄大な風景に目を楽しませることができるのは、ちょうどこの詩である。この広大な琵琶湖の風景を、のみ尽くしてしまうような趣向の新しい詩を作りたいものだ。今日、題はみつけることはできなかったが、自分でも、まあまあ詩が作れたと思う。

一つの詩を作るのに、あまりに熱中してあれこれと思い悩んでいたのも、これからは当分酒を飲んで、詩を考えないで暮らしたいものである。

今までの古い作詩の手法で、あれこれと思索をめぐらして考えている中に、だいぶん時間を費やしてしまった。新しい手法によって眼に変わった面白さを発見したいものと観点をかえると、たちまち、この湖水が中国の有名な西湖に似てきて、波にただよっている月を釣ろうとしているような気持ちになってしまった。

さあ、とうとう釣り上げることができたぞ、大きな魚ではなく、興きのある快心とまではいかないが、自分でも気に入った詩が……。おそくまでこの高楼でねばった甲斐があったというものだ。

【考察】

高楼とは単なる詩の表現とみることもできるが、「千里眼を遊ばすは、この時にあり」と書かれているところから、遠く眺望の開けた高所であることがわかるし、「湖上に月が浮かんでゆれている」といった表現、また、楠亭先生の住居である筑摩から簡単に行けるという地理的条件から考え合わせると、この詩の作られた場所は竹生島の宝厳寺で当時親交のあった、江戸浅草本願寺の住職を迎えて催された吟行会とみるのが無難な解釈のようである。

恐らく長浜御坊あたりに泊まれた上人を案内して催されたものである。難しい漢詩を使つての吟行会であるので、参加者の顔ぶれも自ら限られた人たちであつたことだろう。そうした記録が残されていないため、出席者の顔ぶれは知ることができないが、当時としてはトップクラスの知識人の集いであつたことが推測される。

封建的な幕藩体制の厳しい身分制度の中にあつても、こうしたゆとりのある充実した娯楽もあつたことがうかがえて面白い。

山中四時小景

録 秋

あきしる  
秋を録す

西 風 十 里 稻 梁 肥  
昨夜 山 中 霜 始 飛  
正 是 家 々 農 事 鬧  
戴 星 争 出 戴 星 帰

せいふう じゆり とうりやう 肥ゆ  
きくや さんちゆう しも 始め 飛ぶ  
まさここ いえいえのうじ とう  
まは 是れ家々農事 鬧なり  
ほし いなだ あらそ  
星を戴き争い出でて星を戴いて帰る

○録秋      ロクシユウ      秋を書きしるす、うつすこと。

○西風      セイフウ      にし風、泰風、秋風。

【解釈】

秋風があたり一面に吹き始めると、稲穂が色づき実りはじめる。昨夜、山間の方では初霜を見たそうである。いよいよこれからは、百姓の仕事は忙しく活気を帯びてくる。朝、星の出ている中から人々は争って田圃に出て働き、夕方暗くなって星を仰ぎながら帰ってくる。

忙しいながらも、収穫の喜びにつつまれた農家の生活を力強くうたい上げた詩である。

【考察】

現代の機械化された農業と異なり、総てが厳しい肉体労働に頼らなければならない当時

の農作業は、想像以上のものがあつた。朝星夜星は、何も農業だけに限らず、天秤棒一本で、巨万の富を築いた近江聖人の中にも、この精神が生きていて、店のシンボルマークにしているところさえあつた。然し、その中でもやはり農作業が最も厳しかったのである。そのつらい仕事も、収穫の喜びを迎え、各農家は活気を帯びてくる。

楠亭先生も一農夫として、朝星の輝いているうちから田圃に出て働き、夕方暗くなつて星を仰ぎながら帰るといふのが、この時期の日常生活であつた。

筑摩の湖岸とは反対の東側は広々とした農地が広がり、はるか彼方に伊吹の秀峰が望まれる。すみきつた秋空の下、農作業に精を出しておられる楠亭先生の姿が目には浮かぶような気がする。

残菊

一夜幽人話寂寥  
酒醒茶熟興愈饒  
半籬残菊枝都伏  
不似淵明恥折腰

いちや ゆうじん せきりょうを 話す  
さげさめ ちや じゆく 興 愈々 饒す  
はんり ざんぎく 枝 都で 伏す  
に 似 淵明 腰を 折るを 恥 ずるを

○幽人 ユウジン 浮き世を逃れて静かに暮らしている人、閑静に暮らしている人。

○寂寥 セキリヨウ ものさびしいさま。ひっそりとしている。

○饒 ジョウ ます、ゆたかにすること。

○淵明把菊 エンメイハギク 唐の陶淵明は、性淡泊で物にこだわらず、ある時、九月九日の佳節に酒を買うことができず、籬のあたりの草むらの中に座って、菊の花をとって楽しんでいると、当時の太守王弘の送った酒が届き、酔って後に帰つたという故事による。

【解釈】

静かな晩秋の夜、浮き世を逃れて閑静に暮らしている風流子が集まって、「ものさびしさ」について話し合った。酒は醒めて熱いお茶をすすり話はずんできた。

庭の低い籬根に残っていた菊は、皆倒れ伏している。ちょうど、陶淵明が、太守王弘の送られた酒に、恐縮して腰を折っているような風情がある。

【考察】

「庭の千草」の、かつての文部唱歌にうたわれていたような情景が思い浮かんでくる。この籬根に残って倒れている菊の花から、陶淵明の故事の比喩を持つてくるあたり、さす

がに詩想の豊富さと同時に学識の並々ならぬものを感じさせる詩である。詩のイメージの美しさも、その中に人柄の奥ゆかしさがしのばれて味わい深いものがある。

読南宮詩抄

南宮詩抄を読む

凜然 霜 氣 逼 簾 帷

凜然たる霜気簾帷に逼る

独 把 詩 冊 就 睡 遲

ひとり詩冊を把つて睡に就く遅し

一 燵 青 燈 読 残 處

一燵の青燈読み残す処

半 輪 落 月 雁 過 時

半輪の月落ち雁過ぐるの時

○凜然

リンゼン 心のひきしまるさま。

○廉帷

レンイ すだれととばり。すだれのとばり。

○霜氣

ソウキ 霜のきびしい気配、転じて人の厳しい気性をいう。

【解釈】

心のひきしまるような霜のけはいが、すだれのとばりを通して身にせまってくる。独り詩の本を読んで、眠りに就くことがおそくなってしまった。一つに行燈のともしびを頼りに読んでいったが、とうとう読み残してしまった。

窓の外を見ると半円形の月が、西に沈もうとして雁が夜明けの空を通り過ぎていく。

【考察】

冷気が身にしみる秋は、燈火親しむ読書の秋でもある。現在のように外部の行事に追いつてられている読書週間よりも、本格的な思索と読書は冷気の身にしみる時が最高である。行燈の火の下で、夢中で詩の本を読んでいるうちに、夜もふけ、早や月は西の山に沈もうとしている薄明かりの墨絵のような情景が目には浮かんできく。まだほの暗い湖面と雁の通り過ぎるようすなど、やがて初冬を迎えようとする晩秋の風物がよくとらえられている。

無題

渭水 渾々 七十 余

渭水 渾々 七十余

颯然 面貌 坐 茅 漁

颯然たる面貌 茅に坐して漁りす

不 下 会 態 態 為 紹 介

態々として紹介せしめずば会わず

便 是 尋 常 一 様 漁

便ち是れ尋常 一様の漁にあらす

○渭水

イスイ 川の名。洛水と合し黄河に入る。

○渾々

コンコン 盛んに流れるさま。

○颯然

グンゼン 歯の抜け落ちるさま。

○面貌

メンボウ 顔のかたち。

○態々 タイタイ ことさら特別に。

【解釈】

奥深くて知りがたい七十才余りの老漁師、齒の抜け落ちた一種変わった顔かたちをしており芋ぶきの粗末な家に住んで漁をして暮らしている。

特別な紹介がなければだれにも会おうとはしない。長い年月漁師という仕事に打ち込んで七十年余り漁師一筋に生き、琵琶湖のことなら自分の掌を指すように、何でも知り尽くしている老漁師の詩の題材として取り上げているところが、楠亭先生の人柄がにじみ出ていて面白い。

まるで湖の主のように、魚類の動き天気の変化などを知り尽くしているが、反面恐ろしく偏屈な人で気が向かないとだれにも会おうとしない。目に一丁の文字もない無学な人ではあるが、たまたま楠亭先生とよく気が合い、先生も折々に魚のにおいのしみついた粗末な家を訪れて世間話などをされたことであろう。

今は息子に仕事をゆずり、家の前の砂浜で網を繕っている。齒が抜け落ちて、ひたいには、数本の深いしわが刻み込まれ、長い労働できたえられた容貌には、聞かぬ気の一徹さが現れている。

楠亭先生の質問などに、とつとつとして語る老人の飾り気のない話しぶりなどが目に浮

かんでくるような詩である。

いつか、こうした不思議な老人の顔をとり続けた有名な写真家があったが、楠亭先生の中には、常に親しさがあり、現代にも通じるものがある。

ヘミングウェイの作品「老人と海」に出てくる主人公もこのような漁師ではなかっただろうか。高名な学者である楠亭先生と老漁師との組み合わせもまた面白い。

楽在植物

楽しみは植物に在り

會憐<sup>ニ</sup>草木<sup>一</sup>自無<sup>レ</sup>私

會<sup>か</sup>つて草木<sup>くさき</sup>を憐<sup>あわれ</sup>みて 自<sup>おのず</sup>と私<sup>わたくし</sup>無し

一種千形又萬姿

一種<sup>いっしゆ</sup>にして千形<sup>せんけい</sup>萬姿<sup>ばんし</sup>なり

古今隨<sup>ニ</sup>人之所<sup>レ</sup>好<sup>一</sup>

古今<sup>こきん</sup>ひとこの好<sup>この</sup>む所<sup>ところ</sup>に隨<sup>したが</sup>う

深山大沢出<sup>ニ</sup>珍奇<sup>一</sup>

深山<sup>しんざん</sup>大沢<sup>おおさわ</sup>珍奇<sup>ちんき</sup>を出す

○無私 ムシ 無我又は無心のこと。

○千形万姿 センケイバンシ 形状姿態がいろいろに変化すること。

○珍奇 チンキ 珍しい風光をいう。

【解釈】

かつて、草木の盆栽などを無心に愛したことがある。一種類のものから、いろいろな変

化に富んだ姿、形が生み出され、その人その人の好む所に随って作り出され、昔も今も人の心を引き付けて止まない。

石と木、草の組み合わせで、深山や、山間の溪谷のような珍しい風景さえもあらわすことができる。

【考察】

現代の園芸ブームののって、盆栽を趣味にする人がふえてきている。こうしたせまい空間が、無限に人の心を引き付けて止まないのは、いったい何だろうか。それはその人の好みに従っているいろいろなものが創造され、奥深い空間芸術があるからだろう。今日の家庭も家のまわりに、必ずといってよい程、草花や盆栽を愛する人がふえてきている。それらの人々の心情とも相通じるものがある。

冬夜雑詠

一

永夜 沈々 尅漏 疎  
不<sub>レ</sub>知 催<sub>レ</sub>睡 幾 投<sub>レ</sub>書  
満窓 晴雪 当<sub>二</sub>火炬<sub>一</sub>

永夜 沈々 漏を尅すること疎なり  
知らず 睡を催して幾度か書を投ず  
満窓の晴雪 火炬に当る

読 盡 西山 月落 初  
読<sub>よみ</sub>尽<sub>つ</sub>くす西山<sub>せいざん</sub> 月落<sub>つきお</sub>ち初<sub>そ</sub>む

○永夜 エイヤ 冬至前後の夜、長夜。

○沈々 チンチン 静かに時の過ぎるさま。

○尅 コク ときを刻むこと。

○火炬 カキヨ たいまつ、たてあかし。

【解釈】

長い夜は静かにふけて刻を刻むのもまばらである。自分でも知らないうちに、ねむ気を催して思わず、幾度か書物を投げ出してしまふことがある。

窓いつぱいの明るい雪は、時々吹き込んできて、ともしびにあたって音をたてている。とうとう本を読み残したまま、夜が明けようとして、月が西の山に落ち始めようとしてい

二

雪 擁書堂 照小 楹  
満 簾 寒 影 日 光 明  
夜 半 園 林 風 死 去

雪は書堂を擁して小楹を照らす  
満簾の寒影 日光明なり  
夜半園林風死して去る

却 從<sub>二</sub>茶鼎<sub>一</sub>聽<sub>二</sub>松声<sub>一</sub> 却<sub>二</sub>茶鼎<sub>一</sub>に從<sub>二</sub>松声<sub>一</sub>を聴く

○小楹 ショウエイ 木の柱。

○寒影 カンエイ 寒そうな影、冬の影。

○茶鼎 サテイ 茶を煎じる器。

【解釈】

雪はこの書堂の屋根に降り積もって、小さい柱を明るく照らしている。すべての障子に、寒々とした冬の影がうつり、青白い月の光が明るく照らしている。

まわりの林は、夜半になってまるで風が死んだように静かになった。

それと同時に、鉄びんのお湯の煮え立つ音が、松に吹く風のようにシユンシユンと聞こえてきた。

三

環 堵 東 隣 売 酒 家 環<sub>二</sub>堵<sub>一</sub>東隣酒を売<sub>二</sub>る<sub>一</sub>の家

夜 深 初 覚 絶 喧 嘩 夜<sub>二</sub>深<sub>一</sub>く初<sub>二</sub>め<sub>一</sub>て覚<sub>二</sub>ゆ<sub>一</sub>喧嘩の絶<sub>二</sub>ゆる<sub>一</sub>を

泉 流 凍 合 無 由 汲 泉<sub>二</sub>流<sub>一</sub>凍<sub>二</sub>合<sub>一</sub>して汲<sub>二</sub>む<sub>一</sub>に由<sub>二</sub>なし<sub>一</sub>

掏 取 雪 華 烹 野 茶 雪<sub>二</sub>華<sub>一</sub>を掏<sub>二</sub>取<sub>一</sub>して野<sub>二</sub>茶<sub>一</sub>を烹<sub>二</sub>る<sub>一</sub>

○環堵 カント 東西南北各々一堵の家

【解釈】

楠亭先生の東隣に、家業をついでおられる弟の酒屋があつた。夜がふけて、今まで酔っぱらいの声でにぎわっていたのも、いつしか消えた。

鉄びんのお湯がなくなつたので、水を汲みに出てみると、泉は凍つてしまつていたので、仕方なく雪をすくいとつてきて、鉄びんに入れてきた。

【考察】

冬季は楠亭先生にとって書物を読んで思索を深めたり、遠近を問わずやってくる弟子たちを教える重要な時期でもあつた。然し冬は比較的のんびりとしていて、専ら読書にあて、夢中で読んでいて夜があけてしまったということも、しばしばあつたようである。冬の夜の静かな情景を読んだ詩であるが、三首とも、強い感動といったものがみられず淡々としてよまれている。作詩の年代は不明であるが、恐らく詩の内容から考えて最も晩年の作ではないかと思われる。

人それぞれ好みも異なるであろうが、楠亭詩集全体を通して眺める時、やはり春、夏、秋の詩の中に、読む人の心を引きつけるすぐれた詩がみられる。



## 五、楠亭先生の詩と追悼詩

湖のほとり、筑摩の大自然を愛し、農業を行うかたわら寸暇をさいて学問に励み、人としての道を自らの実践で教え導き、郷風を一変させたといわれている楠亭先生の業績は、中江藤樹先生の再来かともいわれているが、その学問的な成果や比較については、資料も乏しいし、私の専門外であるので論評は避けたい。ただ、漢詩を通じて生の楠亭先生の間像に、たとえ一歩でも半歩でも近づけたらという願いをこめてこの本の編集を行い、稿をまとめてきたが、その願いはどうか果たされ、新しい楠亭像のいくつかを詩を通じて見出すことができた。

嘉永五年、井伊直弼が藩主となり、領内を巡視した際、楠亭先生の篤学を賞されて金子を贈られた。楠亭先生には堅苦しい威儀を正して拝受することに、荣誉には違いないが、心の中では、場違いな感じがしたことであろう。

このことは「客中秋興」の詩の中にも述べられている。

「従来結髪、労苦多し、好く詩狂を以って退耕に合せん」といつておられる。また、「武士の儀礼的な堅苦しさは、苦労の多いものである。興にのつて詩を作ることに没頭し、農作

業に従事するという隠者の生活は、自分のもとと望むところである。」

といっておられるのをみても、およそ、その心中を推測することができる。

その受賞から二年後、嘉永七年七月十二日に、五十五才でこの世を去られた。正に「充実した高潔な一生」ということができる。

夜半になくなられたのか、臨終の際は、湖上に黒い霧が低く垂れ込めて暗然たる様相を呈していたということである。

その葬儀には、生前の先生の高義を慕い、遠近を問わず大勢の人々が続々と集まってきた。身分も地位もない一介の隠者の葬儀にしては、これ程盛大なものではなかったであろう。だれに強制される訳でもなく、ひたすら楠亭先生の人徳を慕って集まってきたのである。

小野湖山の「追悼 楠亭渡辺翁」の詩は、その様子を生き生きと描写している。

また、近くの長沢の福田寺で、楠亭先生の一周忌法要が営まれた際、全国の有志から追悼の詩文がよせられている。それらの多くの追悼詩の中でやはり当代随一の詩人であり、書家としても有名であった小野湖山、楠亭先生と特に親交のあった中川漁村の「楠亭記」が先生の行績を最もよく伝えているため、この二つの資料を中心として楠亭先生の一生とその意義をもう一度考えてみることによって、この稿を終わりたい。

1、中川漁村の「楠亭記」

この「楠亭記」は、彦根藩の藩校である弘道館の儒官をしていた中川禄郎（漁村）が嘉永三年に書いたもので、楠亭先生の在中之ものであり、資料としても確実性と信用度の高いものと思われる。

中川禄郎については、その資料が弟子の手によって書かれたものとして、彦根の図書館に残されている。その性質が、いろいろで常に大きな声で話し、陽気な笑い声は、あたりに響いてその来訪が解ったといわれている。

酒は斗酒なお辞せずといった酒豪で、赤ら顔の大柄な堂々たる体格は、儒学の先生というより、むしろ武術の先生といった方がぴたりするような風ぼうの人であった。

楠亭先生とは特に親交があり、よく筑摩を訪れて、その生き方と高潔な人柄に心を引かれ、思わず筆をとって書き上げたものである。

「楠亭記」

一室一厨南嚮而  
立右有琵琶湖槽

一室一厨南嚮して立つ。  
右に琵琶湖の槽腹最も

腹最廣荻籬紫門  
標渺乎白沙翠竹  
之濱左有園宅弟  
治其産業前有楠  
一株大數圍磊々  
不問主人百里樂  
道好古箒散吟詠  
不求名於當世有  
隱逸古人之風自  
名其室謂楠亭夫  
湖山之勝何限帆  
光鷗影波浪之變  
嵐翠之奇皆可取  
而名焉而獨撰取  
輪困離奇之材而  
自悅嗟呼性之所

ひろきあり。荻籬紫門、標渺乎、白沙翠竹の濱。左に園宅あり。弟、其の産業を治む。前に楠一株あり。大きき數圍。磊々主人百里、道を樂しみ、古を好む。箒散吟詠、名を當世に求めず、隱逸古人の風あり。自ら其の室を名づけ、楠亭と謂う。夫れ、湖山の勝、何ぞ帆光鷗影のみに限らんや。波浪の變、嵐翠の奇、皆取つて名づく可し。而も独り、輪困離奇の材を選取して、自ら悦ぶ。嗟呼、性の好む所、既に

好已興人異故所  
名亦興世俗相反  
坎否不然夫山水  
雖羨矣非己之有  
也一石一木皆官  
之物也楠者世々  
相傳而吾有也主  
人性廉介其意蓋  
在干斯焉其東坡  
抵宜奧邑入慕容  
揮嗜酒好吟不務  
進取所居双楠竝  
立如蓋東坡訪之  
同為双楠居士今  
也百里樂道於隴  
畝亦有楠而立其

ひと異なる。故に名づくる所  
亦世俗と相反する坎。  
否、然らず、夫れ、山水は、  
羨むと雖も、己の有に非ざるなり。  
一石一木皆官の物なり。  
楠は、世々、相傳へて  
吾が有なり。  
主人、性、廉介にして其の意  
蓋し斯に在り。其れ東坡  
宜奥の邑に抵り、慕容の揮に  
入り、酒を嗜み、吟を好み、進取  
を務めず。居る所、双楠竝び立つ。  
蓋、東坡の如し。之を訪れば、  
同じく双楠居士と為す。今や  
百里道を隴畝に樂しみ、亦、楠  
ありて立つ。其の性、

性相似於千百載  
之下不亦奇乎所  
恨有如坡老之人  
而不傳耳余亦曾  
僻在湖南在終焉  
志今日之態有愧  
於百里而深羨百  
里之得其所以  
不得不記也

千百載の下、相似たり。  
亦、奇ならずや。恨むらんば  
坡老の如きの人にして、而も  
傳わらざる所のみ。余、亦、曾つて湖南に  
僻在して志を終るを有らんとす。  
今日の態、百里に愧づる有り。  
而して、深く百里の其の所  
を得たるを羨む。是れ以つて  
記せざるを得ざるなり。

嘉永庚戌秋 八月前一日  
撰亦書水雲茅舎

北窓之下漁村 中川祿郎

## 2、中川漁村の「楠亭記釈」

一部屋と勝手場だけの粗末な小さな家が南向きに建てられている。右には琵琶湖の幅が最も広い所で、紫がきと簡単な門に囲まれ、すぐその向こうには、びょうびょうたる湖水

がひろがっている。

白い砂浜にそって濃い緑の竹藪も多く見られる。左側には、生がきをめぐらした大きな家があり、楠亭先生の生家で、弟が酒屋の店を開いている。

先生の住居である小さな家の前には、樹齢数百年を経て、幹まわりを大人が数人で囲う程の楠の太木があり、主人公である百里（楠亭先生の別号）の壮大なる志を示しているかのようである。

主は、人間としての高い理想に向かって、自分自身を高めていくことを、唯一の生き甲斐として、古の聖人の教えや生き方に心をひかれている。

悠々としてのどかな生活をし、折にふれて詩を吟じるが、それを世に出して自分の名を上げようという気はさらさない。

自分からその小屋を楠亭と名づけてよんでいる。琵琶湖をめぐる湖山の景勝は、ただ湖に浮かぶ白帆や鷗のむらがる湾だけでなく、波浪の刻々の変化、山や島々の緑の美しさなどそのどれをとつてもみなその名にふさわしいものばかりである。

そうしたものに目を向けず、木のふしやこぶのある老樹を愛し、その名前をとつて自ら楠亭と称して楽しんでる。ああ、君の好むところは、世間一般の人々とちがっている。そのために雅号までも常人の考え方とまるきり反対なのだろうか。

いや、そうではない。山水の美は、どれほど心を引かれてみても、自分のものにはならない。一つの石や一本の木でも藩公や領主のものである。それにひきかえ、楠は、代々先祖から相伝えて数百年に及ぶ、我が家の所有物である。主人公は性質が清廉、潔白で、公のものや、他人の所有物から名前をとることを潔しとしなかったという考え方にあるようである。

それはちょうど宗時代の有名な学者であり詩人である蘇軾が宣貞の村に住んでいた容暉という弟子を訪ねると、酒をたしなみ、気分がのると詩を作り、大自然を相手としてあくせくとせず暮らしていた。そしてその住居の横には、二本の楠の木があり、まるで背比べをするかのように、そびえている。主人公は、その二本の楠の木を指して自分から「双楠居士」といつていた。今、百里（楠亭）が、草深い田舎で、学問の道を、人々に教え導き、自分も実践するのを唯一の楽しみとしている。たまたま住居のそばにも大きな楠の木がそびえたっている。主人公の行いや性質は、千数百年という遠い過去の開きはあっても、共に似通っているのは不思議というべきである。

ただ残念なことに、慕容暉や蘇軾にも匹敵する立派な詩人や学者でありながら、今日伝わらないことが多いことである。

私もかつて湖南の地にひきこもって一生を終わろうと決意したが、たまたま召し出され

て現在藩儒としての地位にある。今日の自分をふりかえってみる時、誠に恥ずかしい限りである。そして百里が、自分に最もふさわしい生き方をしているのを、うらやましく思わ  
れてならない。

こうした気持ちをおさえることができず、筆をとって書きしるした。

### 3、追悼 楠亭渡辺翁

小野 湖山

朝坐湖上亭  
暮坐湖上亭  
飢食湖米粲  
渴飲湖水清  
湖水清徹底  
若人何瀟灑  
遯世而無悶  
有政是孝弟

朝あさに湖上こじょうの亭ていに坐まし  
暮くれに湖上こじょうの亭ていに坐ます  
飢うえては湖米こまいの粲さんを食しべ  
渴かつしては湖水こすいの清せいを飲のむ  
湖水こすいの清せいは徹底てつていすといえども  
若人ひとなん何なんぞ瀟灑しょうさいにして  
遯世とんせいして悶もだえ無なきに若しかんや  
有政ゆうせい是これ孝弟こうてい

憶昔訪夫君  
行々湖水濱  
一樹老楠秀  
人指先生門  
迎我飲湖上  
留我煮湖魚  
遙々湖上水  
送我罄晤語  
温潤如瓊玉  
堅貞石與金  
仁厚化鄉俗  
可知所得深  
一別幾幾歲  
赴音數行字  
開緘驚且歎  
不覺潛涕淚

憶あ昔むかし彼かの君きみを訪とう  
行ゆく行ゆく湖水こすいの濱あん  
一樹いちじゆの老楠らうなん秀ひいで  
人ひと先生せんせいの門もんを指させり  
我われを迎むかへて湖上こじょうに飲のみ  
我われを留とどめて湖魚こまかなを煮にる  
遙々ようようたり湖上こじょうの水みづ  
我われを送おくつて晤語ごご罄なし  
温潤おんじゆん如ごとく瓊玉じゆんぎよく  
堅貞けんてい石せきか金きんか  
仁厚じんこう郷俗きやうぞくを化かす  
得うる所ところ深ふかきを知しるべし  
一別いちべつ幾幾いくとせ歳とせを經へて  
赴音ふいん數行すうぎやうの字じ  
緘かんを開ひらきて驚おどろき且かつ歎たんじ  
不覺ふい潛せん涕淚おぼを覺おぼえず

遙聞易簣前  
湖天亦黯然  
遠近慕高義  
會葬人幾千  
往時藤樹氏  
今日楠亭子  
偉哉湖東西  
賢哲後先起  
湖上我旧郷  
夢思何敢忘  
義事常願聞  
逢人問審詳  
寄言湖上友  
墓碑要高乎  
老楠継老藤  
千秋同不朽

遙はるかに聞きく易えき簣さくの前まえ  
湖天こてん亦また黯あん然ぜんたりしと  
遠近えんきん慕こ高義こうぎを慕したい  
會葬かいそうせし人ひと幾いく千せんなり  
往時おうじ藤樹とうじゆ氏しあり  
今日こんにち楠亭なんてい子しあり  
偉いなる故かな湖この東とう西さい  
賢哲けんてつ後あと先さきして起おこる  
湖上こじやうは我わが旧郷ふるさとなり  
夢ゆめに思おもうて何なんぞ敢あえて忘わすれんや  
義事ぎじつ常ねに聞きかんことを願ねがう  
人ひとに逢あえば問とうこと審詳しんじやうなり  
言げんを寄よす湖上こじやうの友とも  
墓碑ぼひ高こうを要ようせんや  
老楠ろうなんは老藤らうとうを継つぎ  
千秋せんしゅう同おなじく朽くちぢざるなり

#### 4、小野湖山（一八一五〜一九一〇）

小野湖山は、東浅井郡浅井町高畑の人で、江戸末期から明治初年にかけて、書家として、詩人としても有名である。九十八才の長寿を得て幅広い活躍をした人である。楠亭先生とは十五才年下で、筑摩の楠亭先生のもとへ訪ねてきたこともある。

楠亭先生が亡くなられた時は、四十才くらいの働き盛りであった。楠亭先生の追悼詩としては最もすぐれた詩であり、読む人に深い感銘を与える。

#### 5、小野湖山追悼詩釈

朝夕、湖に面した小さな家に住んで湖の風景を眺めて暮らしている。腹がすくと、湖水のほとりですれた米を食べ、喉が渇くと湖水の清らかな水を飲んで暮らしている。

たとえ、湖の水が、どこまでも澄みきつていようと、この人（楠亭先生）の清廉潔白で、わずらわしい世俗の悩みから解放された清浄な生き方には遠く及ばない。道を修めその実践は、親に孝行、兄弟仲よく励まし合うことを、その目あてとしてきた。

あゝ昔、君を尋ねて筑摩を訪れたことがあった。幾つかの入江や浜を過ぎると、目ざす筑摩の村が見えてきた。一本の楠の大木がひとときわ高くそびえている。道端で働いている

人に、楠亭先生の家を尋ねると、その人は、楠の木の根方の門を指して教えてくれた。

私の来訪を喜んで迎え、湖上に船を出して飲み、帰ろうとすると私を引き止めて湖でとれた魚を煮て、心からもてなしてくれた。

湖水の水はびよびようとして、まるで主人公の広い気持ちをあらわしているかのようである。

私を送ってくれた時の、あの打ちとけたなつかしい言葉も、今はむなしい思い出の中にしかない。あたたかくて、うるおいのあるやさしい心は、まるで瓊玉の玉のように美しい光を放っている。

また意志の堅いことは、金か石のように、己のいったん思い立ったことは、必ずやり通すという強い意志力を持っている。

その反面、情け深く思いやりのある心は、郷土の気風を一変させる程の感化力があつた。こうした楠亭先生の日常生活に接して、自分は心の中に深い感銘を与えられたことを知つた。

緘を開いて驚き、深い悲しみにおそわれて、思わず涙がほおを伝って流れ落ちた。遠くはるかに聞くところでは、楠亭先生の臨終の前は、湖上は暗雲が低くたれこめて、この偉大な人の死をまるで悲しむかのようにあつたということである。

その葬儀には、遠近から生前の人徳を慕って集まった人は、幾千人に及んだということである。

昔は中江藤樹先生あり、今日、これに匹敵する人は楠亭先生である。湖をはさんで、東と西から、この偉大な賢人と哲学者が、まるで互いに呼応するかのように、時を経てあらわれたことは誠にすばらしいことである。

この近江の地は、私の故郷である。夢にまでも思つて忘れることのできないなつかしい土地である。

いつも故郷から良い便りが届けられることを願っている。近江の国からやってきた人にかう度に、くわしく知人の消息を聞くことを、一つの楽しみにしてきた。

今、幽明をへだてた湖上の友（楠亭先生を指す）に一言申し上げたい。墓や業績をたたえる碑は、どうして高く立派なものを作る必要があるか。老楠（楠亭先生の遺愛の楠の大木）は、老藤（藤樹先生の書院の藤を指す）のあとを継いで、その遺徳は千年のあとまで朽ちることがなく、長く後世の人々の心の中に生き続けることであろう。

#### 【追悼詩考察】

当代一流の詩人であるだけに、やはり読む人の心を打つ重厚なものを感じさせる詩であ

る。この追悼詩を、現在表装されて額に収められて、座敷に掲げてあるのを見せていた。小野湖山は書家としても優れた人であっただけに、その見事な筆跡は、いつまでもながめていても見飽きしないすばらしいものであったことが、今も記憶に残っている。多くの人に慕われ、尊敬されてこの世を去っていった楠亭先生の一生は王者もしのぐ、充実したものであったことが解る。

楠亭先生作の「仲秋作」の詩の中に、「襟懷豈楚台の雄を羨まんや」といっておられるが、これはただの詩の比喻だけでなく、楠亭先生の心意気を示すものとして味わい深い詩である。

## 六、まとめと今後の課題

楠亭詩集を手にして、何とか一冊の本にまとめてみたいと思ったのは、入江小学校時代であり、今から五年あまり前になる。教頭という忙しい仕事の余暇を利用してやっていたために意外と多くの時間がかかってしまった。今ようやく一応の完成を見たことはやはりうれしい気持ちがある。完成といっても、一つの仕事の区切りがつけられただけのことだ、

小中学生向きの「渡辺楠亭先生」の伝記が完成した時が、この仕事の完成であるという風に解釈すると、まだまだ仕事は終わっていない。

楠亭先生の残された詩を通じて今まで明らかにされていなかった部分が、この本によって幾らかでも一般の方々に知っていただければ幸いである。

書くことと、読むことが私の中にある以上、老化の心配は考慮に入れる必要はない。この冊子をまとめるにあたって、細かい字を漢和辞典でひいても、老眼鏡もなしに、何らの不自由もなく続けられたのは感謝の外はない。

また、本書の発刊にあたって、あたたかい序文をいただいた米原町教育委員会教育長福田先生や、編集に際して貴重な資料をころよくお貸しいただいた渡辺文雄氏のご厚情にも心から感謝の意を表するものである。

書かなければならぬことが、我々の周囲に、数多くあることに今更ながら驚いている。今後も身体の続く限り、いろいろなものをもとめて書いていきたいと考えている。

諸賢の今後のあたたかいご指導を切にお願いする次第である。

「終」



△参考資料▽

「楠亭記」(長野義言)

往昔へよりあらしの山の春のはな、広沢の秋の景色とのみ世にはいへども、たゞこのまじきは、渡辺の主の亭なり。阿闍梨の円球のいほり、紹性の松月のいほりなど世にみやびやかなるにないて、水うみの東なるつくまの里に、神さびていとふるりたる楠の木に、しめてみづから楠亭と名のられたり。そのもは、竹のしおり戸、紫のあらわなる垣にて「我はなくとも露やもりけん」などいふらん計にて物思ひなきを、□□の□□つつ住み馴れて見んよもきふのお□□持直の詠ぜしも、これらのことにやと思いやらる。主も唐歌にて「卑陝足容身高明懼他誉」と口号しつつ「富貴是人之所欲也。貧賤是人之惡也。共不以其道」の意にて「曲腕而耽之」たのしみなんおもひやられてあはれなりける。「雪と螢の窓おし明けて、春はもえたる芹間、漕舟、秋は波間に宿る月影、折にふれたる冬のあした、四方の山々浦々はこよのふ目うつりていはん方なし。」おのれ過にしる、かのうしに物学びなどし侍しほど、春の□のわかれをおしむ。おぼろ夜のそら、足引の山はとどぎす待出したる花月夜話をしかの祉、礎のひびき、かねのおときく、在明の影などに、このもかのもの浦に、立もとほり、うそむきありくこちなん尋ねはべりしに、「静所沈吟虚黙々」といらへ玉ひしに、心うつゝに自ら忘れて、さらに、この世人とももほえず。このそのたのしみ、こと

しげき都のうちにはけふえうましかるべくなんありける。かくてぞ、世をうきていとう事なく年ふれども、あかすとかやみゆる。□□なからうき世の□たしにてわりなく常にとはさりつることのあさましさに思いたへすて、嘉永の五の年子のむつきとふ日、おろかなる詞人わらへなるもかえりみすして、なんとたてまつる。

あはれ世の、さだめなきさの白波に

ぬれてかはかめ軒のくすの木

義言上(長野義言)

(註)

この楠亭記なる一卷は、かつて柴田源左衛門の何某なる経師の手にて表装されたる際、その者義言の言の字虫喰みて不明なりしを克の字なるらんとし謝りて心ならずも筆を加えたりと聞き及べり、然れども、こは義言なること後日になりて知らる。

△参考文献▽

- 滋賀の先覚的教育的人間像 滋賀 小学校校長会編 昭和四十三年  
改訂近江国坂田郡志題三卷下  
楠亭詩集 (渡辺文雄氏蔵)  
追悼楠亭渡辺翁 小野湖山  
郷土の先哲 小野湖山 東浅井郡浅井町教育委員会  
楠亭の主の記 長野義言  
大漢和辞典 諸橋轍次著 全十二卷  
新唐詩選 吉川孝次郎著  
杜甫詩注 吉川孝次郎著全三卷  
難字大鑑 山田勝美  
草字苑 若尾俊平・服部大  
良寛全集 東郷豊治著全二卷

△著者の主な略歴▽

- ・大正十四年二月七日 滋賀県坂田郡伊吹町春照に生まれる。
- ・昭和十九年 滋賀師範学校卒業後、小学校教員となる。
- ・昭和三十年 慶應義塾大学文学部を卒業する。
- 創作「法師蟬」「小さい旋風」「海の見える墓標」等で滋賀文学祭に入選する。
- ・「風船物語」教出国語教科書に採用される。
- ・昭和四十六年 毎日新聞、ヤクルト主催の「ありがとう」の作文に指導した児童が入選し、ヨーロッパ旅行に派遣され、オランダ、スイス、フランス、イギリスを旅行する。
- ・昭和四十九年 坂田郡米原町立入江小学校の教頭となる。渡辺楠亭先生の生き方にひかれ、研究を始める。「楽しい環境教育の進め方」で県教委の研究奨励金を受ける。
- ・昭和五十一年 米原市立醒井小学校教頭となる。「漢詩や遺墨にみられる楠亭先生の人間像と現代的意義について」で県教育会の研究奨励金を受ける。

「復刻版にあたって」

まずは、田中弥一郎氏の『楠亭詩集とその背景』の復刻版がこのように出せることは、何よりもうれしい。今、つくづく感じているのは、「人は、人によって学ぶ」ということだ。

田中弥一郎氏は、入江小学校で渡邊楠亭先生の肖像画に出会い、それが契機となって、楠亭先生の詩の研究に取りかかり、五年の歳月をかけて本を自費出版された。一枚の肖像画が人の心を動かし、実を結ばせたのである。その肖像画は、昭和六十一年度に入江小学校と米原小学校が統合されてできた米原小学校の校長室に、今も引き継がれている。

楠亭先生の漢詩は浅学な私には難解であるが、田中氏の解釈や考察によって、その詩が表現する意味の奥深さを感じ取ることができる。楠亭先生が自然や郷土を愛し、名誉や地位に惑わされず、農耕詩人として一生を終えられたことが、私たちの胸を打つ。

ふり返れば、私もこの復刻本を出そうと思ったのも、いくつかの偶発的な出会いがあったからである。例えば、顔戸の澄光寺の前住職である山月教澄氏は渡邊楠亭先生のことを啓発してほしいという願いの下、私の前任の谷村敏博校長に多くの資料を渡しておられた。教澄氏の祖先である山月青山氏と楠亭先生とは深い親交の仲にあったからである。校長室に残されていたそれらの資料の中から、私は弥一郎氏が楠亭先生に関わる本を出されている

たことを知ることができたのである。ただ、その本は米原小学校には一冊もなかった。

さらに、田中家は私の生家の前隣にあった。かつて弥一郎氏の姿を拝見したことはあるが、氏はすでに故人となっておられた。それで、田中家を訪ね、氏が出版された本を借り、そのコピーを基にパソコンに打ち直し、ここにその復刻版ができた次第である。

なお、この復刻版を出すにあたって、渡邊楠亭家の家族の方から貴重な数々の資料をお借りすることができた。それらの資料を参考に田中氏の本を一部修正したものの、田中氏の本をできるだけ忠実に再現した。

もちろん、これでまだ十分な資料になったとはいえない。今後、渡邊楠亭先生の研究が引き継がれ、さらに充実した資料や本ができることを期待したい。また、田中氏も述べておられるように、渡邊楠亭氏の伝記、あるいは道徳的資料ができればもっと子どもたちにも身近な人となるのではないかと思う。

最後に、田中弥一郎家及び渡邊楠亭家のご家族の方の協力に心から感謝するとともに、お礼を申し上げます。

平成二十六年十月一日

前米原市立米原小学校 校長 伊藤 眞雄

---

なんてい ししゅう はいけい  
**楠亭詩集とその背景**

—湖東の聖人「渡邊楠亭」の漢詩を読み解く—

著者 田中弥一郎

米原市春照 423

昭和 54 年 12 月 1 日 発行

平成 26 年 10 月 1 日 復刻版発行

復刻版発行者 伊藤眞雄

<http://www.nexyzbb.ne.jp/~trueblue>

印刷 立木印刷所（米原市醒井 478-1）

---